

## 「愛知の児童文化」資料集（その3）

文化科学研究所児童文化研究グループ

これまで『愛知県史』をはじめ、県内におけるほとんどの市町村では、〈史誌〉が刊行されている。また近年では地域文化重視の時代をふまえ、それぞれの郷土に関する著作も多く出版されている。だがこうした著作物のなかには〈子どもの文化〉に関する情報はほとんど含まれていない。本来〈子どもの文化〉は未来に連なる〈国民文化〉の礎をなし、文化変容と形成のうえで重要な核となるが、軽視されがちとなっている。

本研究所児童文化班では、こうした状況のなかで愛知県内の〈子どもの文化〉を見直すとともに、地域研究の一端として過去を振りかえりながらも、現在、〈子ども文化〉の実態がどのようなになっているかについて調査し、ひとまず研究上の基礎資料としてここにまとめることとなった。

次は資料全体の主な構成である。

1. 児童文化関連施設（歴史・民俗・自然・産業・科学・芸術・芸能・スポーツ・遊びなど）
2. 児童文化団体（文学・演劇・舞踊・音楽など）
3. 文化人名（作家・詩人・評論家・研究者・翻訳家・劇作家・作曲家・演出家・活動家など）
4. 事項（児童文化に関する重要な事項）

上記のうち、「児童文化関連施設」についてはすでに調査を終え、『文化科学研究』Vol. 9 No. 1～2に掲載した。この号では愛知とかかわりの深い文化人のなかで、児童文学関係者のみを掲載する。演劇・音楽・舞踊・絵画などは次号を予定している。

なお、この「文化人名」項目については、次のことに留意した。

1. 文化人の選出については、他の主要な事典を参考とし、本研究所が依頼した各界の代表的な方々の推薦をいただき、研究所の編集委員会で決定した。
2. 愛知県出身者を主体に、配列を50音順とした。
3. 他の領域が専門の方でも児童文学に関わりのある方々には、短い原稿を依頼した。
4. 児童文学の著名人のなかで、県外に在住して愛知県と強く関わりのある方々にも、その関わりを中心に短いエッセーを依頼した。
5. 記載内容は、職種・肩書・専門領域・出年没年・出生地・学歴・活動を中心とした経歴・主な業績・趣味・所属団体歴・現住所・参考などである。
6. 原則として本人自身の執筆とし、表記上の統一を編集委員会で行った。ただし依頼原稿については、末尾に（ ）で執筆者名を記した。
7. 文化人について参考にした文献については、略号を用いて末尾に記した。

『日本児童文学大事典』（大阪国際児童文学館編） 大日本図書、1993

日文

『児童文化事典』（日外アソシエーツ編） 日外アソシエーツ編，1996 文化

『児童文学事典』（日本児童文学学会編） 東京書籍，1988 文学

『児童文学作家案内』（日本児童文学者協会編） 教育出版センター新社，1987 作家

8. インフォメーションは、1998年12月1日現在のものである。なお、この資料集は『愛知児童文化事典』刊行のための第1次資料であり、不備な点を補正したいと思っている。その点でのご指摘をいただきたい。

次の方々は、文化人の選定にあたり、ご推薦をいただいたり、または執筆のご協力をいただいたりした。末尾ながらご援助に対し、深甚の謝意を表したい。

推薦人 大塚菊子 しかたしん 鈴木まこと 出村孝雄 畑中圭一 林美千代（敬称略）

執筆協力者 川出博章 酒井晶代 戸苅恭二 畑中圭一 松田一路（敬称略）

#### 編集委員会

原 昌 酒井 敏 磯部孝子 熊沢順子 服部裕子 今井美都子 高木孝子

（順不同）

## 赤羽根 有里子 あかばねゆりこ

本名内ヶ崎。研究者、岡崎女子短期大学専任講師。文学（研究・日本近世）1959～ 栃木県宇都宮市生まれ。愛知淑徳大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。〔経歴〕研究対象は、江戸期昔話絵本の五大童話「桃太郎」「舌切雀」「花咲爺」「かちかち山」「猿蟹合戦」。口頭発表は「江戸期昔話絵本—『桃太郎』を中心に—」（日本児童文学学会中部例会、1994）、「江戸期昔話絵本『花咲爺』の諸本」（日本昔話学会、'96）など。その他、朝日カルチャーセンター（'94）や「あいち女性カレッジ」（'95）、「岡崎市民カレッジ」（'97）などで、江戸期昔話絵本の講座を担当した。〔業績〕「江戸期昔話絵本『舌切雀』ものについて—雀の宿（隠れ里）の変遷—」（『口承文藝研究』No. 17. '94）、「江戸期子供絵本の絵柄と本文—草双紙昔話ものをめぐって—」（『日本児童文学』Vol. 41—10. '95）、「江戸期昔話絵本『花咲爺』の諸本」（『昔話—研究と資料—』No. 25. '97）〔趣味〕古書店めぐり〔所属〕日本児童文学学会（'95～'97 運営委員）〔住所〕〒444-0015 岡崎市中町1-8-4〔参考〕文化

## 阿久根 治子 あくねはるこ

作家・詩人。文学（創作・詩）1933～ 名古屋市東区北畑（現千種区）生まれ。愛知県立女子短期大学（現愛知県立大学）国文科卒。〔経歴〕1945年（昭20）前後中学時代より現代詩の創作を始め、'53年には現代の環境問題を予感した長編ファンタジー「モクモク町のある一年」を創作。当作品が'60年講談社50周年記念児童文学賞の次点となる。翌'61年元旦、中日新聞紙上に短編童話「地球のそうじやさん」を

発表。以来CBC勤務の傍ら、主として中日新聞紙上に短編童話や長編ファンタジー「ぼくとアリンコ・ピチくん」「リャッタにつばさがはえるとき」のほか、現代詩・少年詩・童謡・エッセイなど多数発表。NHK「みんなのうた」には「高山にカンカコカン」なども。'65年には心臓弁膜症1回目の手術のため退社。大学在学中より愛知県立大学長・国文学者の高木市之助氏に師事した日本古代文学の研究を基に、『やまとたける』を処女出版、同年第16回サンケイ児童出版文化賞を受賞する。'72年『こどもの神話（全5冊）』を盛光社より出版。同年瀬戸内海大三島に取材した竜神と化して島を守った少女の物語『つる姫』を上梓。'80年には『少年の橋』で現代の少年問題を描いた。'86年には古事記下巻の記事を実証的に探査した古代史ノンフィクション『流刑の皇子』を出版。'94年2回目の心臓手術、'98年に3回目の心臓手術で人工弁の二弁置換手術を受けた。その体験記録から、人間の生と死と再生の問題を追求するノンフィクションを執筆中。前期古代大和王朝の骨肉の愛憎劇を題材にした長編も構想中。昭和期を中心にした現代小説も企画している。〔業績〕『やまとたける』〈第16回サンケイ児童出版文化賞〉福音館書店（'69）、『モクモク町のある一年』洛英社（'71）、『つる姫』福音館書店（'72）、『少年の橋』偕成社（'80）、『流刑の皇子』新潮社（'86）〔趣味〕美術・音楽鑑賞、野鳥・昆虫類観察〔所属〕元中部児童文学会・日本児童文学学会、現日本著作権協議会・日本音楽著作権協会・日本文芸家クラブ

〔住所〕〒465-0013 名古屋市名東区社1-1101 4-508

〔参考〕日文・文化・文学・作家

## 阿 部 夏 丸 あべなつまる

本名茂。作家。文学（創作）1960～ 豊田市  
畛部東町生まれ。名古屋芸術大学中退。〔経  
歴〕1995年（平成7）、『泣けない魚たち』で小  
説家としてデビュー。同作品で「坪田譲治文学  
賞」「椋鳩十児童文学賞」をダブル受賞する。  
'96年、「オグリの子」を出版。'97年、「こども  
の本」に、エッセイ「雑魚寝ばなし」を連載。  
'98年、「オグリの子」がNHKでドラマとして  
放送される。同年、『見えない敵』を出版。自宅  
に開設した「創造空間おーぶんはうす」で、子  
どもたちと絵画造形活動を行いながら、小説を  
書き続けている。〔業績〕『泣けない魚たち』  
〈第11回坪田譲治文学賞・第6回椋鳩十文学  
賞〉ブロンズ新社（'95）、『オグリの子』ブロンズ  
新社（'96）、『見えない敵』ブロンズ新社（'98）  
〔趣味〕釣り・川遊び

〔住所〕〒470-1211 豊田市畛部東町宗定  
234-1

〔参考〕文化

## 阿 部 紀 子 あべのりこ

筆名滝口。研究者、大学講師（非）。文学（研  
究・絵本）1948～ 静岡県焼津市生まれ。上越  
教育大学大学院教育学研究科修了。教育学修  
士。〔経歴〕短期大学非常勤講師として児童文  
化、児童文学、言葉を担当。幼稚園教諭や保母  
免許取得カリキュラムに絵本の分野が薄いた  
め、子どもの楽しみと成長、大人との関係に絵  
本が果たす役割が大きいことを強調し、さらに  
芸術としての絵本を大人も味わうことの豊かさ  
と楽しさを伝えている。図書館主催の母親講座  
の講師を務めるほか、子どもの本にかかわる婦  
人たちと、『お母さんが選んだ128冊の絵本』

『子どもと楽しむはじめての文学』を編集する。  
〔業績〕『講談社の絵本』の変遷と戦時下の絵本  
としての側面（『児童文学研究』No. 27. '94）、  
「児童出版美術の先駆者多田北鳥」他（『研究  
「子どもと文化」』No. 1～6. '93～'97）、「昭和  
初期における絵本印刷の諸問題」（『児童文学論  
叢』No. 3. '97）、「絵本の読みきかせ場面におけ  
る母子会話」（『教育学論集』No. 5. '92）、「魅力  
ある絵本の構成-『パンはころころ』と『おだん  
ごぱん』の読者の反応を通して-」（『研究「子ど  
もと文化」』No. 7. '98）〔所属〕日本児童文学  
学会

〔住所〕〒465-0022 名古屋市名東区藤森西  
町1007-S-201

## 安 楽 良 弘 あんらくよしひろ

研究者、愛知江南短期大学助教授。文学（研  
究）1939～ 鹿児島県熊毛郡上屋久町生まれ。  
東洋大学文学部卒。〔経歴〕近隣市町（教育委  
員会）の依頼で、主として父母を対象に、児童  
文学（幼年文学を含む）全体にわたり、諸講演  
活動を続けている。〔業績〕「児童文学のタ  
ブー」（『江南女子短期大学紀要』No. 12. '83）、  
『児童文学』（共著）学術図書出版社（'84）、『保  
育と児童文化』（共著）学術図書出版社（'86）  
〔所属〕日本児童文学者協会（'82～86）

〔住所〕〒483-8018 江南市般若町中山6-  
4

〔参考〕文化

## 池 田 譲 いけだゆずる

作曲家・作詞家。文学（詩）、音楽（作曲）、  
文化運動 1927～ 渥美郡高豊村（現豊橋市）  
生まれ。愛知学芸大学卒。〔経歴〕〈童謡・唱  
歌〉継承と創造「カナリヤの会」（主宰）をはじ

めてから11年を経ている。1985年（昭60）のころ、日本童謡協会（中田喜直会長）から季刊『どうよう』が刊行され、編集長は藤田圭雄氏であった。わたしが'47年、郷里の小学校代用教員として教師生活に入った折、藤田氏編集の『赤とんぼ』を教室で購読。子どもたちの作文をこの雑誌によく投稿した。そして児童文学へのまなざしを得た。岡崎師範学校から愛知学芸大学音楽教室へと進み、NHK豊橋放送児童合唱団の伴奏者として放送に加わった。その経験から童謡研究・創作への道が生まれた。創作「笛を吹く子らの記」は現職中にリコーダーに取組んだ子らとの実践をもとに生まれた作品で、掠鳩十氏に推された。停年後、「カナリヤの会」で本居長世・弘田龍太郎・北原白秋の童謡・歌曲のイベントを開催。その間に合唱構成詩「アカウミガメのふるさと」、野外劇「てんてん てんぐの舞いおどり」などの発表をした。〔業績〕「笛を吹く子らの記」〈第3回「子とともに児童文学賞」、最優秀賞〉（'78）、『のれたぞ一輪車』（責任編集）国土社（'90）、豊橋市電唱歌（作曲）とよはし市電を愛する会（'92）、「アカウミガメのふるさと」（親子の合唱組曲 作詩・曲）愛知のうたごえ祭典実行委員会（'94）、「てんてん てんぐの 舞いおどり」（こどものための野外劇 作詩・曲）（'94）〔趣味〕ピアノ、郷土史探訪 〔所属〕日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会、日本子どもの本研究会、日本音楽教育の会

〔住所〕〒440-0055 豊橋市前畑町11

〔参考〕文化

## 池 原 は な いけはらはな

作家。文学（創作）1921～ 姫路市生まれ 愛知県立刈谷高等女学校卒。〔経歴〕私は父

（自由律の俳人・池原魚眠洞）の娘として育ったせいか、幼いころより創作が大好きだった。少女時代には、鈴木三重吉の『赤い鳥』に掲載される詩や童話にひかれ、結婚後には、その頃、中日新聞で募集しはじめた童話に、15回入選。1980年（昭55）『きつねっ子先生』で、第21回講談社児童文学新人賞を受けた。つづいて『それゆけ！どーれ先生』でサンケイ児童出版文化賞推薦となる。その後幼年童話を出版する。〔業績〕『きつねっ子先生』〈第21回講談社児童文学新人賞〉講談社（'81）、『それゆけ！どーれ先生』〈第31回サンケイ児童出版文化賞推薦図書〉講談社（'84）、『小さいおばさん』ひしまの出版（'90）〔趣味〕読書・映画 〔所属〕元名古屋童話作家協会、元中部児童文学会

〔住所〕〒464 名古屋市千種区清住町3-33

〔参考〕文化

## 石 原 志 保 いしはらしほ

本名林。大学講師（非）。文学（研究）・教育（国語）1961～ 南設楽郡鳳来町生まれ。愛知教育大学大学院・教育学研究科修士課程終了。〔経歴〕あまんきみこの作品に関する研究活動を主としている。とくに、表現面からのアプローチを中心とする。最近では、共同研究の一環として、新美南吉「ごんぎつね」を取り上げ、あらすじを書く能力の、学年発達の研究に取り組んでいる。〔業績〕「あまんきみこの表現」（『表現学大系・童話の表現』所載，教育出版センター'89）、「あまんきみこ著作目録」（『研究「子どもと文化」』（No.6.'97, No.7.'98）〔趣味〕韓国語

〔住所〕〒441-8087 豊橋市牟呂町水神15の2（林方）

## 磯部 孝子 いそべたかこ

研究者。大学講師（非）。文学（研究・英米）  
1948～ 名古屋市生まれ。中京大学文学部文学  
研究科修士課程修了。文学修士。〔経歴〕子ども  
たちを育てながら、児童文学と児童文学を愛  
する人たちに会う。文学研究では、1982年に  
中京大学の聴講生となり、同時に東海児童文化  
協会の研究部会に参加し、その後大学院へ進ん  
だ。専門分野は英米児童文学であるが、とくに  
アメリカの「大草原の小さな家」シリーズに注  
目している。児童文化の地域研究にも関わり、  
中京大学文化科学研究所で'89年から、愛知県  
立大学では'97年から各研究グループに加わっ  
ている。〔業績〕「名古屋と周辺地域の口演童  
話活動-明治末から昭和前期まで-」（『文化科学  
研究』Vol. 4-2. '92）、「仏教日曜学校の成立と  
口演童話活動」（同 Vol. 6-2. '94）、「〈小さな  
家〉シリーズにみるオプティミズム」（『児童文  
学論叢』No. 4. '98）〔趣味〕美術鑑賞〔所属〕  
東海児童文化協会、日本イギリス児童文学会、  
日本児童文学学会、名古屋童話協会

〔住所〕〒468-0011 名古屋市天白区平針1  
-601 平針西住宅2-204

## 伊藤 炭 いとうひろし

ストーリーテラー・作家。文学（創作）・語り  
1916～ 名古屋市千種区田代町生まれ。東京大  
学文科中退。〔経歴〕1964年（昭39）、名古屋  
市教育委員会調査企画課長から鶴舞図書館副館  
長に転任したのであるが、これには次のような  
わけがあった。ある局長で退職した人と対談し  
たとき元局長の語った一言によるのである。元  
局長のいわれた一言とは。「私は市に30年勤  
め、いろいろな部課を経て、局長で退職したの

だが、自分の人生を振り返って何ものこらな  
かった」と。この一言が私の心を強くうった。  
停年まであと10年。振り返って何も残らない  
人生は送りたいくない。そう考えて図書館を志願  
したのである。私は中学生時代から自分は会社  
勤めなどできない。できるのは小学校か中学校  
の先生しかないと考えていた。それには深い理  
由があったのであるが、今はそれにはふれない  
ことにする。結論をいえば図書館へかわってよ  
かった。多くの子どもさんたちやお母さん方と  
心のふれあいができ、それが私の人生の生甲斐  
となったからである。〔業績〕『さるがしまの  
さるくん』私家版（'72）、『くじらのラジー』〈フ  
レンドシリーズ〉新進（'73）、『さるがしまのさ  
るくん』佼成出版社（'75）、『本と幼児』私家版  
（'79）、ラジオドラマ「ダム村」（NHK）〔所  
属〕元中部児童文学会、元東海児童文化協会  
（会長）

〔住所〕〒486-0931 春日井市松新町4丁目  
3173 番地

## 井上 寿彦 いのうえとしひこ

作家、東海学園女子短大教授。文学（創作、  
研究・日本近代）1936～ 名古屋市東区竪代官  
町（現代官町）生まれ。名古屋大学文学部卒。  
〔経歴〕1961年（昭36）より愛知県立高校の教  
諭として教壇に立つたかわら、小説を書き『教  
育評論』に「時計」「星の街」を発表。日教組文  
学賞を受ける。'76年に書いた「三リットルの  
月光」が講談社児童文学新人賞（佳作）になっ  
たのを機に児童文学に進む。'81年には『みど  
りの森は猫電通り』を出版。岐阜の『コボたち』  
に「マーチングマーチ」など多くの短編を載せ、  
中部児童文学会・日本児童文学者協会の会員と  
して活動している。'88年より東海学園女子短

期大学国文学科に勤務。創作・日本語表現法などを担当するかたわら、宮沢賢治の研究をする。その賢治の講座を朝日カルチャーセンター・豊田市・東浦町・西枇杷島などでもつ。'94年（平6）には愛知県図書館での「あいちの生んだ児童図書作家展」の監修、'98年には日本児童文学者協会編『ふるさと童話館・愛知の童話』の編集を担当した。【業績】「田園詩人はどこへ行く」〈北川千代賞〉（'79）、『みどりの森は猫電通り』〈新美南吉文学賞〉講談社（'80）、「鳥の賢治と島の南吉」（『賢治 vs 南吉』所載、文溪堂'94）、『「オッベルと象」小論-オッベルは死んだか-』（『東海学園国語国文学会 30 周年記念論集』、'98）、「星たちの燦めく丘」（小説、『中部児童文学』No. 84、'98）、第 9 回日教組文学賞（'74）、コボたち文学賞受賞（'86）【趣味】音楽、旅、園芸 【所属】日本児童文学者協会、中部児童文学会（事務局長）、宮沢賢治学会イーハトーブセンターほか。

【住所】〒461-0002 名古屋市東区代官町  
26-25

【参考】文化

## 今 江 祥 智 いまえよしとも

作家・評論家。文学（創作・評論）1932～大阪市生まれ。同志社大学英文科卒。【経歴】1954年（昭29）、名古屋市立桜丘中学校に着任。英語科教員として'60年まで勤務。その間に、同人誌『近代批評』に拠って創作、評論を発表、それがきっかけとなり、『岐阜日々新聞』に長篇「山のむこうは青い海だった」を連載することになる（'59）。同誌の五田章人氏の肝煎りだった。一方「母の友」誌（福音館書店）に童話「トトンぎつね」「三びきのライオンのこ」「ぼけっとくらべ」などが掲載され（'57～8）、これが

きっかけで童話を書き始める。『山のむこう～』は理論社から刊行され（'60）、童話もまとめて同社から『ぼけっとにいっぱい』（'61）として刊行される。'60年に上京、福音館書店編集部勤務、'68年に京に戻り、聖母女学院短大で児童文学を講ず。'83年から季刊誌「飛ぶ教室」に長篇「牧歌」を連載。名古屋の教員時代の体験を下敷きにした作品である。長篇連作『ぼんぼん』の第四部にあたるが、最終章「第九交響曲」を発表したのは'94年。『牧歌』は'89年に理論社から刊行されたが、完全版は『ぼんぼん・全1冊』（'95年）に収められている。執筆期間は24年に亘るが、名古屋時代の教師体験が、40年をかけていかされたといっている。'81年から著作活動に専念。最新作は小説『帽子の運命』（原生林）。翻訳にサロヤン作『ワンデイ・イン・ニューヨーク』（新潮文庫）バンサン作『老夫婦』（BC出版）などがある。【業績】『今江祥智の本』全3巻理論社（'80～'92）、『マイ・ディア・シンサク』（小説）新潮社（'94）、『幸福の擁護』（評論）みすず書房（'96）、『でんでんだいこいのち』〈第45回小学館児童出版文化賞〉（絵本）童心社（'95）、『夢色の大通りで』（長篇）理論社（'97）、第14回サンケイ児童出版文化賞（'66）、第14回日本児童文学者協会賞（'74）、第15回野間児童文芸賞（'77）、第10回路傍の石文学賞（'88）受賞 【所属】元聖母女学院短大（教授）、現日本児童文学者協会（理事）

【住所】〒606-8274 京都府京都市左京区北  
白川大堂町11-3

【参考】日本・文化・文学・作家

## 今 井 美 都 子 いまいみつこ

研究者。文学（研究・評論）1957年～ 島根

県益田市生まれ。愛知県立大学文学部卒。〔経歴〕児童文学を楽しむだけでなく、深く知りたと思うようになったのは、フィリパ・ピアスの『まぼろしの小さな犬』を読んでからである。絵本・児童文学の中にこそ、さまざまな本質が詰まっていると感じている。これは、「ちびくろサンボ」論争の研究を通して痛感した。単なる「ちびくろサンボ」問題だけでなく、底にある問題を見据えてこれからの研究テーマとしていきたい。〔業績〕「帝国の玩具としてのSAMBO—*The Story of Little Black Sambo* の成立当時の「意味」」（『児童文学研究』No. 28. '95）、「なぜ今〈モモちゃん〉なのか—〈モモちゃん〉シリーズにおけるバックラッシュ—」（『HYORON 未満』No. 2. '97）、「2冊のアメリカの改作本 *Sam and the Tigers*, *The Story of Little Babaji* について」研究報告（『児童文学論叢』No. 4. '98）〔趣味〕天体観測 〔所属〕日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会、名古屋児童文学評論の会

〔住所〕〒468-0074 名古屋市天白区八幡山  
1101-1、5-203

## 鵜 生 美 子 うのよしこ

評論家。文学（評論・日本現代）1946～愛知県西加茂郡猿投町（現豊田市）生まれ。仏教大学通信学部国文科卒。〔経歴〕1965年（昭和40）、勤務した保育園でのお話・絵本・紙芝居などが、あまりにも教訓的なものばかりに疑問を持ち、'69年に中部児童文学会へ入会。同時に読書サークルを作り、手作りの機関誌『うらやま』を発行する。'71年同誌第2号に「グスコブドリの伝記について」を発表。それが『日本児童文学』（日本児童文学者協会刊）に推薦作として掲載されたのを機に、同会会員とな

り、以後、同誌に書評、作家・作品論などを'84年まで随時発表する。一方、『中部児童文学』にも「同人誌運動のあり方」「児童文学と原爆覚之書」その他を発表し、同会の事務局を'70年から'74年まで担当する。その後、身体を壊し'79年同会を退会。つづいて'85年日本児童文学者協会をも退会する。以後、'88年（平1）ごろから名古屋湿地研究会に所属し、友人らと山野を歩く。〔業績〕「どんぐり裁判にみる宗教的倫理観とは」（『注文の多い料理店研究』No. 2. 所載）学芸書林（'75）、「宮口しづえ—童話の世界」（『信州白樺』36・37合併号'80）、「オッペルと象」（『賢治研究』No. 15. '73）、「宿題ひきうけ株式会社」論（『現代日本児童文学作品論』所載、すばる書房 '74）、「今江文学の中の少女像」（『児童文学評論』No. 9. '74）〔趣味〕乗馬 〔所属〕元日本児童文学者協会、中部児童文学会（'70～'74事務局長）

〔住所〕〒463-0012 名古屋市守山区茶臼前  
14-34-301

〔参考〕文化

## 歌 見 誠 一 うたみせいいち

詩人。文学（童謡）1911～1974 蒲郡市（旧蒲郡町小江）生まれ。名古屋電気学校卒。〔経歴〕蒲郡町（現蒲郡市）役場に勤務し、主に戸籍関係の仕事にたずさわりながら童謡を書きつづけた。1931年（昭和6）、『赤い鳥』7月号で童謡「れんげほして」が第一席に選ばれ、以後、同じく愛知県出身の新美南吉と競い合い、かつ交流を深めながら『赤い鳥』に計11篇の童謡を発表した。いわゆる短詩型印象詩が童謡界を席捲していた時代風潮もあって、この時期の歌見には「榛の花」「残り火」など、シンプルな表現の奥に抒情をひそませた作品が多い。なお新美



南吉から歌見にあてた書簡が47通残っており、ふたりの間にはかなりの影響関係があったことがうかがわれる。『赤い鳥』廃刊後は、まど・みちおや水上不二らの童謡同人誌『昆虫列車』に加わり、童謡の創作をつづけた。同誌に発表した30篇近い作品のなかには、たとえばアイヌ・ユーカラにもとづく物語童謡「アイヌの童子」「雀の酒宴」があり、新しい童謡の世界をきり開こうとする意欲的な姿勢がうかがえる。ほかにナンセンスなおもしろさをねらった「町のうちは屋」、抒情性のつよい「草に寝て」「おぼろ夜」など注目すべき作品がある。とくに「おぼろ夜」は本多鉄磨の曲を得て、ラジオ放送された。大戦後、歌見は童謡から離れ、もっぱら俳句に心を傾けた。死後17年の'91年、小林林之助編の『歌見誠一童謡集』が刊行されたが、これが唯一の作品集である。(畑中圭一) 【業績】小林林之助編『歌見誠一童謡集』ラルン社('91)(代表作「れんげぼして」「おぼろ夜」「草に寝て」「物語童謡ユーカラ」など) 【参考文献】赤座憲久「ふるさとの童謡詩人」(『再考新美南吉』所載、エフエー出版'93) 石川精一「歌見さんのこと」(『歌見誠一童謡集』所載、ラルン社'91) 【所属】「昆虫列車」(同人) 【参考】文化

### 江 川 罔 彦 えがわくにひこ

作家。文学(創作)1940～ 瀬戸市生まれ。明治大学文学部卒。【経歴】1974年(昭49)、第15回講談社「児童文学新人賞」に応募し佳作入選。それを機に本格的に児童文学に取り組む。'76年、中部児童文学会に入会。愛知・岐阜・三重にまたがる先輩諸氏の薫陶を受ける。'83年、日本児童文学者協会に入会。'85年、新日本出版社より『おれはカットン』を上梓する。【業績】『おれはカットン』新日本出版社('85)、

『立花マサミは男か女か?』くもん出版('86)、『おばあちゃんはわたり鳥』くもん出版('89)、『シンコウ三人組』佼成出版社('90)、『がんこじいさんのゆめの国』くもん出版('91) 【趣味】読書、音楽、テレビゲーム 【所属】日本児童文学者協会、中部児童文学会

【住所】〒489-0069 瀬戸市東松山町280

### 江 藤 初 生 えとうはつみ

作家。文学(創作)1932～ 東京都生まれ。立教女学院高等学校卒。【経歴】1951年(昭26)～54年、野間教育研究所に在籍、『近代教育制度発達史』全30巻(講談社刊)の編集助手をする。'64、'65年にNHK教育テレビ『おかあさんの勉強室』のアシスタント・司会を経験するなかで、子どもの生活の周辺に関心を寄せるようになる。またおのずから、戦時のまっただなかで無味乾燥ともいえる児童・少女期をすごした。とくに、植民地(旧満州)という特異な環境にあったために、心に刻まれたことも多く、現代の子どもたちの内面に強い関心を寄せるようになった。【業績】『からすになったぼく』小学館('85)、『ちちお屋・パパや・コオカンヤ』小峰書店('88)、『大きな窓のキャンパスで』くもん出版('89)、『マネキン・フーガはぐるぐる回る』文溪堂('96)、『消えない雪の子どもたち』PHP研究所('96) 【所属】日本児童文学者協会、中部児童文学会(元副会長、事務局長)

【住所】〒470-0202 西加茂郡三好町三好丘

5-1-11 三好ヶ丘ヒルズ2-1406

【参考】文化

## 大 石 源 三 おおいしげんぞう

研究者。文学（研究・新美南吉）1929～ 半田市岩滑生まれ。愛知学芸大学臨時教員科卒。  
〔経歴〕郷土の童話作家、新美南吉に惹かれて、1955年（昭30）ころから南吉の童話や生涯に関心を持つようになって、調査や研究をはじめた。'59年の南吉の十七回忌法要、半田市の南吉顕彰会の設立の準備などから、南吉の童話をはじめとする資料を集めようとして、「南吉文庫」を岩滑小学校の片隅につくり、原稿や童話集、日記、写真、紙芝居、南吉の同級生や教え子の聞き取りなどを収集した。'77年からは、岩滑コミュニティセンターの三階に「南吉資料室」を開設し、それらの資料を一般公開し、室長として資料の保存、収集をしていた。その後、「校定・新美南吉全集」の編集にたずさわった。'94年（平6）に、半田市が南吉の代表作「ごんぎつね」にゆかりの深い、岩滑の中山に「新美南吉記念館」が開設されたので、ここで、顕彰会の事務をしていて、'96年に退職した。  
〔業績〕『校定・新美南吉全集』（編集）大日本図書（'77～'85）、『ごんぎつねのふるさと』エフエー出版（'87）、『南吉のふるさと（南吉資料）』半田市立博物館（'85）、第19回中日教育賞（'87）〔所属〕新美南吉著作権管理委員会（常任委員）、新美南吉顕彰会（'92～'96 事務局長）

〔住所〕〒475-0961 半田市岩滑中町5-160

〔参考〕日本・文化

## 大 西 巨 口 おおにしきょう

口演童話家・作家・新聞記者。文学（創作）・口演童話・編集出版 1988～1971 京都生ま

れ。浄土宗立第五教学校（現京都東山高校）卒・早稲田大学専科修 〔経歴〕1916年（大5）、名古屋新聞（現中日新聞）社会部記者時代に、同僚の亀山半眠、浜田南国らとともに、「名古屋新聞お伽団」を結成し、神社仏閣の境内や小学校校庭などでお伽噺講演（口演童話）を始める。以後記者業よりも、口演童話と童話創作に意欲的に取り組む。'19年6月には念願の子ども雑誌『兎の耳』を出版。翌年経営が名古屋新聞に移り、5年後の'24年に発行中止となる。『兎の耳』に心血を注いでいた巨口は新聞社を辞し、自力で『兎の耳』を再発行するが、3年目に廃刊。巨口は『兎の耳』にほとんど毎号創作童話や童謡を発表している。作品の種類も多く、外国作品の再話「大勇士」（ドンキホーテ）や、仏教童話「韋提希夫人」（観無量寿経）、動物寓話、童話劇、童謡など多様である。作品の特徴は人の感性に訴える話芸的表現で、予想外のストーリーを展開させながら、子どもたちを主人公とともに、冒険の旅へ、ときには美しいが怖い黄泉の国へ誘うものである。『兎の耳』終刊以後、時勢の要求で青少年団や銃後児童文化連盟の育成に参加。戦後は名古屋童話協会会長などを務めて、児童文化の発展に努める。'59年伊勢湾台風で家財一斉を流失。'61年から'63（昭38）まで名古屋童話協会発行の『童話人』に「童話50年の懐古」を連載。'71年には、CBC文化賞を受賞。同年7月15日に死去。本人の遺志により献体した。（熊沢順子）〔業績〕「大勇士」（『兎の耳』Vol. 3. -2, '21）、「韋提希夫人」（『兎の耳』Vol. 3. -11, '21）、「板倉嘉平太」（『同』Vol. 5. 臨時増刊号, '23）〔参考文献〕『大西巨口と兎の耳』名古屋童話協会（'72）、熊沢順子「大西巨口、人と作品」（『文化科学研究』Vol. 4, No. 2. '92）〔所属〕元名古屋童話協会

(会長)

〔参考〕 日 文

岡 田 弘 おかだひろし

作家・郷土史家・郷土芸能研究家。郷土史・芸能（万歳）・ストーリーテリング（むかし話）・文学（創作）1926～名古屋市東区生まれ。〔経歴〕郷土史では、1947年（昭22）から名古屋市地域史に取り組んでいる。分担執筆を含めて著書20冊を超す。東郷土史の会は'92年（平4）設立で、'98年の愛銀教育文化助成金を受賞した。万歳については、'55年から関わり、著書・論文は20を超す。尾張万歳をはじめ各地万歳歌詞レコードと解説書（東芝）は、'77年に文化庁芸術祭の優秀賞を受けた。童話・昔話では'47年から'85年まで、県内の昔話・伝説などの聞き歩きをし、400話以上となり、20冊を超す著書となり、『広報なごや』にも執筆したりも、語りもしてきた。'65年から、むかし話の朗読も始め、名古屋市内図書館での語りは'90年まで、毎年数回行なってきた。'91年から北図書館、つづいて東・守山、'95年から鶴舞中央の計4館、'93から国公立病院（2院）に出かけ、定例にて月6回の語りをしている。その際社会教育センターや中日文化センターなどで私の講座に出た人たちが同行する。また、語りやすいように、アクセントを付けた自作の童話も10数話執筆した。〔業績〕『矢田学区叢書』第1～12号私家版（'68～'98）、名古屋市文化財叢書『尾張万歳たずねたずねて』前・中・後編 名古屋市教育委員会（'70～'72）、『名古屋のむかし話』愛知県郷土資料刊行会（'80）、『徳川家康の庭訓状』東文堂（'85）、『弘の話す童話』第1～3集私家版（'86～'87）〔趣味〕囲碁、読書（歴史・随想）〔所属〕民俗芸能学会、

東区郷土史研究会（会長）、全国童話人協会（委員）、名古屋童話協会（委員）、童話の会（主宰）

〔参考〕 文 化

岡 本 勝 おかもとまさる

研究者、愛知教育大学教授。文学（研究・日本近世）1938～三重県松阪市鎌田町生まれ。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。文学博士。〔経歴〕1979年（昭54）初夏、『松阪市史』文学編を編集集中の私は、松阪市射和町の大日堂にある木造地藏座像の胎内にあったという、子ども絵本10冊のコピーを見た。それらは、子ども絵本が江戸の赤小本に始まるとする通説の訂正が必要な資料であることに気付いた。そこで、'80年6月の近世文学会で10冊の子ども絵本の紹介およびその意義について発表し、同趣旨のことを岩波書店刊の『文学』にも掲載した。これらの子ども絵本は、文部省の出版助成金を得て、'82年に角川書店から『初期上方子供絵本集』として刊行。さらに、'85年には岩波書店から『近世子どもの絵本集』が刊行されたが、その〈上方編〉に10冊の中から4冊が転載された。'88年には弘文堂から『子ども絵本の誕生』を刊行。子ども絵本は京都で生まれたこと、大人向けの副産物であったことなどを述べた。'96年6月の近世文学会では「後期上方子供絵本をめぐって」を発表。研究上の専門領域は日本近世文学だが、現在も近世の子どもの本にも関心を持ちつづけている。〔業績〕『大淀三千風研究』桜楓社、（'71）、『初期上方子供絵本集』角川書店（'82）、『子ども絵本の誕生』弘文堂（'88）、『近世俳壇史新攷』桜楓社（'88）、『『奥の細道』物語』東京堂（'98）〔趣味〕音楽、映画〔所属〕近世文学会（常任委員）、俳文学会（常任委員）、鈴屋学会（代表）

〔住所〕〒510-8103 三重県三重郡朝日町柿  
3161

**沖 井 千代子** おきいちょこ

作家。文学（創作）・放送 1931～ 愛媛県生まれ。広島県立広島女子専門学校（現県立広島女子大学）国文科卒。〔経歴〕被爆前の広島原爆々心地に幼年時代を過ごし、その後山口県岩国市で育ち 1973 年（昭 48）より名古屋市に居住する。’56 年、『婦人朝日』の懸賞童話に入選、童話の執筆をはじめ。’60 年より NHK の児童・幼児番組の脚本の執筆をはじめ。’68 年、「もえるイロイロ島」を“チロ吉ものがたり”として初めて出版。その後、そのシリーズは 4 冊となる。『ひばだこがんばる』『ホタルとぶ』（講談社）は“越原左衛門ものがたり”のシリーズとして出版。作家坪田譲治氏主宰の、童話雑誌『びわの実学校』を抛りどころに作品を発表する。坪田氏逝去のあと、同人によって継承されていた『季刊びわの実学校』に、そして現在は、年 3 回発行の雑誌『びわの実ノート』に、同人として参加し、作品を発表している。〔業績〕『はしれ！おく目号-くまのチロ吉ものがたり-』実業之日本社（’73）、『歌よ、川をわたれ』講談社（’80）、『こちら、いじめっ子対さく本部』金の星社（’83）、「すいかの種」（小学校国語教科書 4 年）学校図書（’83）、ラジオ番組「お話でてこい・風の子フウタくん」NHK（’87）、山口県芸術文化振興奨励賞受賞（’74）〔趣味〕クラシック音楽 〔所属〕日本児童文学者協会、日本放送作家協会（代議員）、「びわの実ノート」（同人）

〔住所〕〒465-0053 名古屋市名東区極楽 2  
-43、高橋方

〔参考〕文化・作家

**織 田 まゆみ** おだまゆみ

研究者。文学（研究・アメリカ）1954～ 山口県熊毛郡田布施町生まれ。立命館大学法学部卒・中京大学大学院文学研究科修了。文学修士。〔経歴〕子ども時代から、とくに翻訳の児童文学愛好者だったが、1980 年代のある出会いから児童文学研究を志す。東海児童文化協会の児童書部会月例会と研究誌『児童文化』は、刺激と勉強の場を提供してくれている。中京大学教授原昌氏に師事。’97 年、’98 年にかけて日本イギリス児童文学会で、アーシュラ・ル・グウィンについて 2 回、研究発表をした。〔業績〕「ジローの悩み・サリーの敵」（『児童文化』No. 26. ’94）、「エヴァの味」（『児童文化』No. 28. ’96）、「幼児の文化環境-保育絵本・紙芝居・幼年雑誌・おもちゃ・テレビについて」（『児童文化』所載 No. 25. ’93）〔趣味〕舞台鑑賞、バードウォッチング 〔所属〕東海児童文化協会、日本イギリス児童文学会

〔住所〕〒464-0073 名古屋市千種区高見 1  
-8-1 グランドメゾン高見 B の 1

**小 野 敬 子** おのけいこ

研究者、大学講師（非）。文学（研究・新美南吉）・ストーリーテリング 1935～ 東京都中野区生まれ。佛教大学卒。〔経歴〕1972 年（昭 47）、自主グループ「児童文学波の会」の結成とともに新美南吉の研究を始め、今日まで南吉作品の研究結果を 1 年 1 作と心にきめて機関紙『波紋』に発表し続けている。その間、’80 年には佛教大学の卒業論文に「新美南吉の研究」を提出して学長賞を受賞した。また、この頃から作品研究のために覚えた南吉幼年童話のスリーリーテリングを始め、研究のかたわら、図書

館・学校・生涯学習センターなどで聞き手といっしょに楽しんでいる。南吉や児童文学についての講師を勤め、'86年からは名古屋市児童図書選定委員も勤めている。'92年（平4）、1年1作研究の集積として『南吉童話の散歩道』を出版、'98年の改定増補版は、第11回新美南吉顕彰講演会での講演「愛の築設—懐かしき隣人達の物語—」を付加したもの。ともに日本図書館協会選定図書となる。'94年からは愛知学泉女子短期大学非常勤講師として、幼児教育学科の児童文学論を担当している。〔業績〕「新美南吉の研究」〈佛教大学卒業論文学長賞〉（'80）、『南吉童話の散歩道』中日出版社（'92）〔趣味〕読書〔所属〕児童文学波の会、日本児童文学学会、ごんぎつねの会、児童図書館研究会

〔住所〕〒464-0006 名古屋市千種区光が丘  
1-11-15

〔参考〕文化

### 小 尾 出 雲 おびいずも

研究者。文学（研究・日本近代）1937～長野県茅野市豊平生まれ。国学院大学文学部卒。〔経歴〕1970年（昭45）東海児童文化協会の発足された年の秋に当協会児童書部に所属し、今日に至る。当部会の活動状況の特徴の第1に各年に主要テーマを設け各国または共通文化圏の児童文学あるいは当文学のジャンル毎の研究をすることであり、しかも発表する担当者を分担する。その活動の具体的成果が「子どもの本—推薦図書150選」（'77）と「よんでおきたい子どもの本」（'88）で、これらの活動に中心メンバーとして参加。なお、現在は個人研究に各年一作家の作品に向かい、現在は立原えりかを研究している。〔業績〕「未明の詩情性について」（『児童文芸』Vol.20-8.'74）、「保阪嘉内に

宛てた書簡に見る宮沢賢治」（『児童文化』No.21.'89）、「“往きて還らず”に至るまで—安房直子、七十年代初期文学の断面—」（『児童文化』No.29.'97、No.30.'98）〔趣味〕短歌創作、旅行、山登りなど〔所属〕日本児童文学学会、東海児童文化協会（副会長）

〔住所〕〒486-0968 春日井市味美町2-69

### 角 田 茉 瑳 子 かくだまさこ

作家、大学講師（非）。文学（創作）1941～岐阜市生まれ。名古屋市立女子短期大学（現名古屋市立大学）卒。〔経歴〕文学作品としては、'84年（昭59）に「竹人形」で「キリスト教児童文学全集」に入選。同年「だんだら蝶の舞う里」で岩崎少年少女歴史小説佳作入選。'85年に「竹人形」で「中日新聞社'84年度テレホン童話最優秀賞」を受賞。次いでNHKドラマ「パイプオルガン物語」の脚本制作。'86年には『ゆきと弥助』が岩崎少年少女歴史小説賞を受賞。この作品は'87年代に中央児童福祉審議会推薦文化財指定、その翌年に岐阜県芸術文化奨励賞を受賞、第17回日本児童文芸新人賞をも受賞、また全国中学校読書感想画課題図書に指定され、'90年（平2）には『小学5年・道徳』の教科書となる。'90年に『鶴よ・清流にはばたけ』を上梓、中央児童福祉審議会推薦文化財指定。岐阜東高校国語教材および全国高等学校国語研究会教材となる。'93年に『ギンギツネの恋・関市創作民話集』の執筆および全体を監修し、岐阜県関市教育委員会から刊行。'95にこの作品集は英訳され、英語教材となる。翌'96年『蘭丸・夢の途中』を上梓、全国学校図書館ブッククラブ（SLBC）中学向け選定図書に指定された。〈愛知〉との関わりについては'84年に中部児童文学会に入会。また'91年より中

京大学文化科学研究所に所属し、愛知の子ども祭りを調査研究し、その成果を研究所紀要『文化科学研究』に「子ども祭りに見る日本文化の源流〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕」として掲載。また『洗堰に日は昇る』戯曲脚本（岐阜県輪之内町）や「長良川想いはるかに」「風が舞う」「燃えて嬉野」（日本コロムビア）の作詞をもてがけ、その他映像作品、共著多数がある。〔業績〕『ゆきと弥助-紙すきのうた-』〈岩崎少年少女歴史小説賞受賞、第11回日本児童文芸新人賞受賞、岐阜県芸術文化奨励賞受賞〉岩崎書店（'86）、『鶴よ、清流にはばたけ』岩崎書店（'90）、「子ども祭りに見る日本文化の源流・その1 きねこさ祭りの場合」（『文化科学研究』Vol. 4-2. '93）、「子ども祭りに見る日本文化の源流・その2 かあか祭りの場合」（『文化科学研究』Vol. 6-2. '95）、『蘭丸・夢の途中』岩崎書店（'96）〔趣味〕旅行〔所属〕日本児童文学者協会、日本児童文学学会、岐阜児童文学研究会（副会長）、日本児童文芸家協会

〔住所〕〒500-8113 岐阜県岐阜市金園町1  
丁目5番地

〔参考〕文化・作家

## 勝 尾 金 弥 かつおきんや

作家・研究者、愛知県立大学名誉教授。文学（創作・研究）1927～ 石川県金沢市生まれ。金沢大学教育学部卒。〔経歴〕創作としては1968年（昭43）牧書店から出した歴史小説『天保の人びと』がサンケイ児童出版文化賞を受賞。以後加賀藩に材をとった歴史読物（ノンフィクションを含む）を相次いで発表、『能登のお池づくり』（牧書店）で泉鏡花記念金沢市民文学賞、『七つばなし百万石』（偕成社）で日本児童文学者協会賞を受けた。また昭和史における

アジアを扱った作品も、マレーシア人被爆者を描いた『マレーシアの語り人』（汐文社）、愛知県出身でインドネシア独立に尽した近藤三郎『なぞのエス・コンドー』（リブリオ出版）、名古屋三菱大江工場で空爆を受けた台湾少年工の『緑の島はるかに』（大日本図書）などがあり、総点数は40冊を超える。研究活動としては、'71年愛知県立大学児童教育学科に赴任、児童文学ゼミにより学生の指導に当るほか、歴史読物を中心とした児童文学史の研究を進め、その一端をまとめた『惣明期の歴史児童文学』は明治期のこの分野の研究の新たな一石と評価された。以後、研究対象は大正・昭和期の全般に広がり、新美南吉や森銑三などの伝記的研究をはじめ、巖谷小波、田村直臣、木村莊八、西村真次、鈴木三重吉、中野重治、石川淳等に関する論文を次々と発表、大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』全三巻（大日本図書）の編集委員も勤めた。'92年県立大学を退官、'98年まで梅花女子大学児童文学科教授として学部生・大学院生の指導に当たった。〔業績〕「かつおきんや作品集」（全18巻）偕成社（'82～'83）、『黎明期の歴史児童文学』〈日本児童文学学会奨励賞〉アリス館（'77）、『人間新美南吉』大日本図書（'83）、『森銑三と児童文学』同（'87）、『緑の島はるかに』同（'89）〔所属〕日本児童文学者協会、日本児童文学学会

〔住所〕〒920-0965 石川県金沢市笠舞1-19-22

〔参考〕日文・文化・文学・作家

## 神 谷 登志子 かみやとしこ

作家。文学（創作）1952～ 幡豆郡一色町生まれ。愛知県立一色高等学校卒。〔経歴〕1986年（昭61）より童話創作を始める。中部児童文

学会会員となる。現在、児童文学者浜たかや氏の創作教室「扉の会」に所属。その間、同人誌「扉」「亜空間」などに作品を掲載。地元での活動としては、安城童話の会で安城ホーム・ニュースや有線放送などで、定期的に小作を発表中である。〔業績〕「傘」〈第8回カネボウ・ミセス童話大賞優秀賞〉(『ミセス』所載'88)、「プスニのお店」〈第3回家の光童話賞優秀賞〉(『家の光』所載'89)、「粉ミルクください」(『ほんとうにあったおばけの話』第1巻所載、偕成社'90)、「人面石のひみつ」(『みんなこわい話』第5巻所載、偕成社'97)〔趣味〕映画鑑賞〔所属〕中部児童文学会

〔住所〕〒446-0007 安城市東栄町2丁目9  
-20

〔参考〕文化

## 河 合 雅 雄 かわいまさを

筆名<sup>くさやま と</sup>草山万兎。動物学者、日本福祉大学生涯学習センター長、兵庫県立人と自然の博物館長。文学(ノンフィクション)・文化運動 1924～ 兵庫県篠山町生まれ。京都大学理学部卒。〔経歴〕子どものときから、自然が大好きで山や野や川でよく遊んでいた。昆虫少年であったし、雀・もず・しじゅうからなどを雛から育てたり、動物を飼育したりした。旧制高校のとき、子ども向きの短い動物と少年の物語を書いたが、そのまま放っておいた。だが、50歳の折り、『子どもの館』に動物誌を連載することになり、長く眠っていた2編をここに含め、1976年(昭51)には、これを『少年動物誌』として上梓した。現在はフレーベル館より、草山万兎の名で〈河合雅雄の動物記〉を刊行中である。すでに'98年には第1巻『ゲラダヒヒの星』を刊行し、全10巻の予定で進行している。'96年より、小

学館児童出版文化賞の審査委員も務め、また一方で兵庫県、人と自然の博物館の館長として、子どもの自然教育の推進にあたっている。今年の夏は〈ボルネオジャングル体験スクール〉の団長として、兵庫県の小学校5年生から高校3年生までの生徒24人とマレーシアの中学生8人を引率して、ボルネオ島サバ州の熱帯多雨林の原生林で6日間を過ごした。子どもたちが〈野生の力〉を取り戻したのがうれしかった。〔業績〕『少年動物誌』〈第14回野間児童文芸推奨・作品賞〉福音館書店('76)、『小さな博物誌』〈第39回産経児童出版文化賞〉筑摩書房('91)、『ゲラダヒヒの紋章』福音館書店('78)、『ジャングルタイム』理論社('92)、『たまたまうっかり動物園』①②③、小学館('95, '96)〔趣味〕低山歩き〔所属〕京都大学霊長類研究(所長)、〔財〕日本モンキーセンター(所長)

〔住所〕〒484-0081 犬山市丸山山寺3-3

## 川 勝 泰 介 かわかつたいすけ

研究者、市邨学園短期大学教授。教育学・児童文化学(研究)1951～ 京都市生まれ。関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。文学修士。〔経歴〕大学在学中より児童文化・絵本の研究に取り組み、主に日本子どもの本研究会会員や京都子どもの本の学校運営委員として読書運動や啓蒙活動に参加。一方で、大阪市内の社会福祉施設内に開設されていた子ども文庫のリーダーとして読み聞かせなどにもかかわる。大学院修了と同時に市邨学園短期大学保育科に就職。以後、専ら「児童文化」概念の形成過程を中心に子どもの生活と文化のかかわりに関する研究に従事。また、1985年(昭60)から約二年少々の間、犬山市の委嘱により、犬山市創作童話教室の講師として創作童話の指導

にあたる。そこでの成果は、犬山市のテレホン童話として毎月発表されるとともに『いぬやまの創作童話』（'88）としてまとめられている。その後、発起人の一人として日本子ども社会学会（'94年設立）の設立に参画、以後、幹事を経て、'98年現在理事・紀要編集委員。また、日本児童文学学会の理事であるとともに中部例会の事務局長も務める。【業績】『児童文化』（共著）福村出版（'82）、『保育と児童文化』（共著）学術図書出版（'86）、『生活保育の創造』（共著）法律文化社（'98）、「児童文化論再考」（『人文科学論集』No. 36. '84）【所属】日本児童文学学会（理事）・日本子ども社会学会（理事）

【住所】〒509-0131 岐阜県各務原市つつじが丘2-160

【参考】文化・作家

## 川 出 博 章 かわでひろあき

研究者。文学（研究・佐藤一英）1934～名古屋市中区丸田町（現千代田）生まれ。慶応義塾大学経済学部中退。【経歴】韻律の詩人、佐藤一英（愛知県一宮市出身）は1999年（平11）10月13日が生誕百年である。一英の活動は詩業の外、童謡・童話、美術評論、文化論、書画など多彩である。それゆえ年譜の不備も散見され、10年来の逸文調査で多大な成果をあげた。一英の童謡・童話のうち、少年少女誌『宝の玉』（新愛知新聞社刊）と『コドモの本』（朝日新聞社会事業団刊）の二誌は未見が多く、探索中である。一英の童謡・童話の全体像の解明が、当面の目標である。なお、一英をしのび「く大和し美し」と佐藤一英」と題してふるさと切手が、'99年に発行される。【業績】『雑誌「児童文学」と佐藤一英』緑の笛豆本の会（'93）、『青春時代の利一と一英』（上巻、下巻）緑の笛豆本の

会（'97）、『雑誌『児童文学』と佐藤一英』（『子ども文化学研究』No. 3. '95）【趣味】戦後沖縄の郵便史資料収集 【所属】日本児童文学学会、東海児童文化協会

【住所】〒491-0353 一宮市萩原町萩原34

## 川 端 有 子 かわばたありこ

研究者、愛知県立大学助教授。文学（研究・英米）1962～京都府京都市左京区一乗寺小谷町生まれ。関西学院大学大学院文学研究科修士課程修了・博士課程満期退学。文学修士。【経歴】『トムは真夜中の庭で』の「子ども時代」と「庭」というテーマで卒業論文をまとめたのが、きっかけで、児童文学の中の「庭」のイメージに興味を抱き始め、修士論文では、そのテーマを大人の小説にまで広げて、その後しばらく現代小説を研究してきた。しかし近年、本格的に児童文学研究に帰ることを決意、以後、19、20世紀の英語圏の児童文学研究に携わっている。具体的な対象はF. H. バーネット、L. キャロル、その他現代の女性作家たち。1998年度より日本イギリス児童文学学会の理事に就任、また日本児童文学学会、日本ルイス・キャロル協会の会員でもある。現在はイギリスの世紀転換期の少女読み物と、ナショナル／ジェンダー・アイデンティティの形成の関係などに興味を持っている。また大学では英米研究各論、演習、講読などの授業で児童文学作品を教材に取り上げることが多く、英米文化理解の手がかりとして、それらの紹介、解説を行っている。【業績】「Elizabeth Bowenの短編小説研究（1）-子ども・林檎の木・庭」（『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』No. 25. '93）、「ペネロピ・ライヴリーの『アスター・コート』-ファンタジーの構図を読む」（*Tinker Bell* No. 41.



’95)、『『夏の終わりに』を読む-読者としての主人公』(『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』No. 29. ’97)、『『ローリーの娘』-バーネット夫人と〈英国神話〉の形成』No. 35. ’98) History into Myth-The Anatomy of a Picture Book (英文、共同) *Bookbird* Summer, ’98 【趣味】児童文学散歩(イギリス・アイルランド) 【所属】日本イギリス児童文学会(理事)、日本児童文学学会、日本ルイス・キャロル協会

〔住所〕〒468-0069 名古屋市天白区表山3  
丁目216-204

#### 北 原 和 美 きたはらかずみ

作家。文学(創作)1954～ 名古屋市瑞穂区井戸田町生まれ。名古屋大学教育学部卒。〔経歴〕1978年(昭53)、公募による紙芝居『ななじゅうまるのおひなさま』を童心社より発行。ミニコミ誌の仕事をしながら、創作の道に入る。はじめての創作「黒いのら犬」が、名古屋市の小学4年生の副読本になる。芝居にも興味を持ち、子ども向けぬいぐるみ人形劇の脚本を書き、みずからもぬいぐるみの衣裳をつけて、ステージに立つ。〔業績〕『ゆめ風ふいたら』新日本出版社(’82)、東海ラジオ「さん!さん! モーニング」(オリジナル童話放送 ’83～’84)、『ぶかりぶかりパン』岩崎書店(’84)、『ふたりの風色ハーモニー』くもん出版(’92)、「公園のベンチに」〈名古屋文化振興賞戯曲の部佳作入賞〉(’92)、「青い霧の国」(’96) 【趣味】ロックコンサート、旅行

〔住所〕〒464-0005 名古屋市千種区千代が  
丘1-102-509

〔参考〕文化、作家

#### 北 原 宗 積 きたはらむねかず

作家・詩人。文学(創作・詩)1931～ 長野県東筑摩郡島内村(現松本市大字島内)生まれ 信州大学工学部卒。〔経歴〕1976年(昭51)から’79年にかけて、雑誌『詩とメルヘン』(サンリオ)に詩の発表を始めたのを機に、児童文学の創作活動にはいる。’77年から’79年まで「日本童話会」に所属し、少年詩と童話を発表。’77年「中部児童文学会」に入会、現在まで、少年詩、創作、エッセイなどの発表を続けている。’79年、詩「アシカ」ほかで「第1回日本児童文学創作コンクール」入選。それを機に「日本児童文学者協会」に入会、現在まで、少年詩、創作、エッセイなどの発表を続ける。’81年、少年詩と批評「みみずくの会」同人結成に参加、’83年退会までに、少年詩、エッセイなどを発表。また、’83年、少年詩「織音の会」結成に参加、’85年退会までに少年詩を発表。’92年詩「たこ」が教科書『小学国語4上』(大阪書籍)、1997年詩「人間ピラミッド」が『あなたにおくる世界の名詩』全10巻(岩崎書店)に収録された。〔業績〕『子どもの詩の花束 五十センチの空』(詩集)らくだ出版(’85)、『雪女のスケッチブック』小峰書店(’87)、『影よ さらば』くもん出版(’90)、『夕やけ色のトンネルで』〈第38回課題図書〉岩崎書店(’91)、『電話Boxのむこうがわ』佼成出版(’92) 【趣味】スキー・海外旅行・ロックコンサート・ビデオ製作・読書ほか 【所属】日本児童文学者協会、中部児童文学会

〔住所〕〒464-0005 名古屋市千種区千代が  
丘1-102-509

〔参考〕文化・作家

## 北 村 憲 司 きたむらけんじ

作家。文学（創作）1929～ 三重県桑名郡多度町生まれ。三重大学学芸学部卒。〔経歴〕1947年（昭22）小学校助教を振出しに、以後40余年教師生活が続け、'90年小学校長を最後に退職する。子どもに出会って童話に関心を持ち、'50年日本児童文学者協会新人会に属して創作を始める。その後同人誌『子どもと文学』を経て、三重で『つみきの会』を興し、風土に密着した児童文学をめざす。伊勢新聞を發表の場とし、同人誌『つみき』を創刊するが一号で挫折。新人会で知り合ったしかたしん氏に誘われ開局間もない中部日本放送で、子ども番組にドラマ、バラエティーなどを書く。それと併行して戦後口演童話で活躍していた都島紫香、福島佐松氏などが拠る「中部童話作家」に入会する。'42年会の性格、姿勢を明確にするという論議が興り、中部児童文学会と改称し、日本児童文学者協会中部支部を兼ねることになる。それに積極的に参画する。同人誌も『中部童話作家』から『中部児童文学』となって発足する。その間、編集、会長などにたずさわる。'68年処女作『うりんこの山』（理論社）を出版し、同人誌、創作活動にようやく腰がすわった時期と言える。その後「チョビ屋は町のまがりかど」『坂道のある学校』（共に偕成社）『木の精こだま物語』（小峰書店）『風よぶカモン』（PHP）など精力的に著作活動が続けるが、校務多忙となり、中部児童文学会を退く。'90年退職と同時に「三重児童文学の会」を設立、子どもの本のフェスティバル、戦後三重児童文学展などを開き、地域で活動が続ける。〔業績〕『ハトと飛んだぼく』〈第3回新美南吉文学賞〉大日本図書（'70）、『まぼろしの巨鯨シマ』〈第19回産経児

童出版文化賞〉理論社（'71）、『しいの木のひみつのはなし』〈第5回ひろすけ童話賞〉草土文化（'93）、『ギンヤンマ飛ぶ空』〈第36回日本児童文学者協会賞〉小峰書店（'95）、三重県文化奨励賞（'97）〔趣味〕囲碁〔所属〕日本児童文芸家協会（理事）、日本児童文学者協会、三重児童文学の会（会長）

〔住所〕〒511-0103 三重県桑名郡多度町戸津 588の4

〔参考〕日文・文化・文学・作家

## 鬼 頭 隆 きとうたかし

作家・詩人。文学（創作）・ストーリーテリング 1950～ 名古屋市北区山田町生まれ。名城大学卒。〔経歴〕自作童話の朗読を幼小・中・高・大学または労働組合などで年間60回行っている。妻と二人で朗読。娘が作曲をし、ピアノ演奏で即興にてBGMを担当している。年に一度名古屋市芸術創造センターにて「おじんの童話会」と称し新作童話の朗読会を行ない、1998年（平10）度に、第14回目を行なった。テレビ出演にはCBCテレビ45周年記念「吟遊おじんとあの子たち」などがある。「夢中会」と名づけた子ども、若者たちとの交流も15年間つづいている。皆から「おじん」と呼ばれている。〔業績〕『ぞうさんのふとん』チャイルド本社（'91）、『詞集みえないものがみたい』愛知書房（'94）、『続みえないものがみたい』愛知書房（'95）、『CDブック桜の下で月の下で』愛知書房（'96）、『童話もずの心』愛知書房（'98）

〔住所〕〒462-0814 名古屋市北区山田西野 3-119-3

〔参考〕文化

## 木村桂子 きむらけいこ

作家。文学（創作）・ストーリーテリング  
1947～ 東京都生まれ。大阪大学大学院工学研究科修士課程修了。工学修士。〔経歴〕1983年（昭58）の愛知県教育振興会「子とともに」児童文学賞の受賞を機に、児童文学作家の故棕鳩十氏の知遇を得て、児童文学作家としてのスタートを切った。青春期に自然科学の教育を受けた特質を活かして、科学的な思考過程をストーリーにとり入れ、いたずらに日常に流されない生き方を、子どもたちに紹介しようと考えているが、その延長として国際的な思考法をも身につけてもらいたいと願い、世界各地の神話・民話・古典作品などを再話している。再話活動の中心は、図書館・保育所・幼稚園などに出張する「ハートの会」で、語り・仮面劇・人形劇・パネルシアター・スターライトシアター（従来のブラックシアターの技法より長時間で大パネル）など、子どもが親しみやすい手法でストーリーテリングをし、12年経った現在、その手応えを感じている。一方、おとなが子ども時代の虚心にもどって、子どもと接する重要性をも痛感し、その虚心を交流させる場として、同人誌『きぼっこ』を主宰している。〔業績〕『泣くなあほマーク』ひくまの出版（'85）、『屋根の上のゆうれい』ひくまの出版（'85）、『カンニング魔女ズルリ』ひくまの出版（'91）、『ワール・ホールの夏休み』評論社（'95）、訳書『時計ネズミの謎』（翻訳）評論社（'98）〔趣味〕散歩・絵馬収集〔所属〕同人誌『きぼっこ』（主宰）、「お話あそびハートの会」

〔住所〕〒465-0065 名古屋市名東区梅森町  
1-335

〔参考〕文化・作家

## 桐谷 正 きりたにただし

作家。文学（創作）1951～ 富山県婦負郡八尾町西町生まれ。同志社大学文学部卒。〔経歴〕古代中国、ことに中国戦国時代から秦始皇帝による天下統一に至る時代を背景に、歴史小説を書いている。主なテーマは、秦始皇帝とその周辺に生きた人々の人生観、世界観についてであり、2千年の時空を隔てた社会の異質性と、現代社会にも通じる共通性・普遍性を探りたいと考えている。また、児童文学作品としては、故郷の富山県を舞台にした作品を書くと同時に、中国少数民族の苗族、哈尼族に伝わる民話の翻訳を行っている。〔業績〕「高漸離と筑」〈第14回歴史文学賞佳作〉（『別冊歴史小説-時代小説特集10-』'90）、『始皇帝を撃て』海越出版社（'92）、『柳繫』海越出版社（'94）、『龍の眠っている山』〈第14回『子とともに』児童文学優秀賞〉愛知県教育振興会（'96）、『驪山の夢』新人物往来社（'96）〔趣味〕魚釣り・音楽鑑賞

〔住所〕〒487-0035 春日井市藤山台 3丁目1-3 343-204

〔参考〕文化

## 黒柳啓子 くろやなぎけいこ

詩人。文学（詩）1934～ 名古屋市生まれ。愛知淑徳高等学校卒。〔経歴〕私が詩に興味を持ちはじめたのは高校2年の頃である。父が戦死、母が百姓仕事をしながら万屋を営み、店番の手伝いをしながら、いろんな詩集を読ながら自分でも作品を書いてみたいと漠然と思うようになっていた。1957年（昭32）、「中日くらし友の会」発足とともに会員となり、そこで童話作家池原はなさんと知り合い、彼女のすすめで

’62年に名古屋童話作家協会に入会。それから創作童話や詩の投稿ををはじめる。’76年、書店で「季刊民話」に出会い、これが私の求めている世界だと思い、この会に入り、東北地方への採話に同行。そのことで、幼い日に祖母の昔話を子守歌に育った私の最初の詩集『砂かけ狐』の下地となった。’76年、詩人中条雅二氏との出会いがあって童詩を創りはじめる。時間の流れの中、すっかり様変わりした千種区汁谷で三人の子どもを育て終え、心の中に残るかつての汁谷の情景を基本にした作品を表現していきたいと思っている。〔業績〕『黒い日の丸』私家版(’73)、『砂かけ橋』(詩) 教育出版センター(’87)、『赤いべんとうばこ』(童話) 近代文芸社(’92)、『によごによご』(詩) 椋の木社(’92)、『父ちゃんの足音』(詩) 教育出版センター新社(’95) 〔所属〕中部児童文学会、日本文学者協力会、えんじゅの会、青い地球、東海少年詩研究会、民話と文学の会

〔住所〕〒464-0013 名古屋市千種区汁谷町  
113

〔参考〕文化

### 小 島 禄 琅 こじまろくろう

詩人。文学(詩) 1917～ 小牧市生まれ。〔経歴〕名古屋で発行されていた日刊新聞に3～4回童話を書いたのが、児童文学との最初の接点で、17歳位であった。公務員になってからは、同人誌に現代詩、創作などを発表したのが、管理職に組み込まれると、体力的に文学活動が難しくなった。30年余り休筆の後、立ち戻ったのが少年詩、童謡の分野、次いで現代詩であった。童謡代表作に「ロボットくん」(渡辺茂作曲)、「大きな木」(小林由美子作曲) などがある。〔業績〕『海を越えた蝶』(少年詩集) 教育

出版センター(’91)、『地球がすきだ』(童謡詩集) 教育出版センター(’92)、『春の蛇』(現代詩集) 日本詩壇社(’41)、『運河沿いの道』(同) 私家版(’91)、『指』(同) 詩画工房(’94) 〔趣味〕映画鑑賞 〔所属〕日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会、日本童謡協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブほか

〔住所〕〒485-0012 小牧市小牧原新田  
1278-2

### 小 林 玲 子 こばやしれいこ

作家。文学(創作)・口演童話 1936～ 西尾市生まれ。金城学院短期大学卒。〔経歴〕童話を書いたり、絵本などをスライドにして、保育園や小学校で朗読している。子どもの詩なども朗読する。新聞のコラムに身辺雑記の短文を書いている。1998年(平10)に5年分をまとめて随筆集『海辺のそよ風』を出版。母親教室、女子大などの講師も勤める。また朗読ボランティア養成講座で、朗読の指導もする。共著にて「西尾の民話」などをも出版した。〔業績〕『白いブーツの子犬』〈第3回大阪国際児童文学館ニッサン童話大賞優秀賞〉(’87)、『サケの子ピッチ』〈第6回『子とともに』児童文学賞優秀賞〉KTC中央出版(’95)、『海辺のそよ風』アトリエ出版企画(’98)、〔趣味〕朗読 〔所属〕日本児童文学者協会、中部児童文学会

〔住所〕〒444-0324 西尾市寺津町浜北41

### 駒 田 貴 子 こまだたかこ

研究者、大学講師(非)。文学(研究・日本近世)・教育(国語) 1948～ 北海道夕張市住初生まれ。藤女子大学文学部卒、奈良女子大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士。〔経歴〕専門は日本文学の平安女流文学で、児童文

学は、厳密には専門外の領域といえるが、授業の教材研究を重ねるうちに、独自に日本の古典文学と児童文学との関わりなどに関心を持ち、再話化されている絵本のさし絵の問題点や、古典文学-とくに『源治物語』に表れている〈子ども〉の表現について考察を続けている。以前は、子育てと並行して、親子読書会を図書館で続け、その後も子どもの成育と読書の関連についても関心を持っている。〔業績〕『紫式部日記』-形容詞〈をかし〉を中心にして-、(『岡崎女子短大研究報』No. 14. '80)、「六条御息所試論」(No. 16. '82)、「藤壺試論」(『名古屋平安文学研究会々報』No. 11. '83)、「親子読書会の記録-その経過と意義-」(『岡崎女子短大研究報』No. 17. '83)、『『蛭蛤日記』医者の歴史認識について-作者の「安和の変」のとらえ方-」(『名古屋明德短大紀要』No. 19. '95)〔趣味〕音楽、芝居見物〔所属〕中京文学会、日本児童文学学会、名古屋平安文学研究会

〔住所〕〒451-0066 名古屋市西区児玉3-19-19

## 近 藤 洋 子 こんどうようこ

研究者、東海学園女子短期大学助教授。文学(研究・童謡)1950～ 名古屋市生まれ。東洋大学文学部卒。〔経歴〕現代文学を専攻しているが、1985年(昭60)4月からの、短期大学における一般教育科目や国文学科の専門教育科目の講義において、明治から大正にかけての日本児童文学史、および現在の状況などについてふれている。また、'91年からはゼミ生20名のうち、毎年7～8名が卒業論文で児童文学を研究しており、その指導にあたっている。〔業績〕『『小学唱歌』にみる教訓的性格』(『東海学園女子短期大学紀要』No. 21. '85)、「白秋の童謡指

導-『赤い鳥』を通してみた-」(『東海学園国語国文』No. 30. '85)、「童謡の抒情-西条八十の場合-」(『東海学園国語国文』No. 31. '86)、「西条八十の歌謡詩-『東京行進曲』」(『東海学園国語国文』No. 32. '86)、「唱歌にみる天然美の推移-『日本風景論』の影響-」(『東海学園国語国文』No. 33. '88)〔趣味〕散歩〔所属〕日本児童文学学会、日本近代文学会、昭和文学会

〔住所〕〒465-0097 名古屋市名東区平和が丘1-135 光ヶ丘ハイッ B703

## 酒 井 敏 さかいさとし

研究者、中京大学助教授。文学(研究・日本近代)1959～ 千葉県千葉市生まれ。早稲田大学教育学部卒・同大学大学院文学研究科博士課程満期退学、文学修士。〔経歴〕早大大学院在学中から、早稲田中学・高等学校非常勤講師、次いで同大学文学部助手を勤め、1988年(昭和63)、中京大学に赴任、専任講師を経て現職。この間、森鷗外を中心に、日本の近・現代文学を研究する。〈鷗外文学における子ども〉を考察する過程で、児童文学とその研究に興味を抱き、中京大学文化科学研究所児童文化研究グループに加わった。以後、従来の研究と併行して、愛知県にゆかりの深い新美南吉を中心に、児童文学の研究を進めている。児童文学の領域における現在の主な研究テーマは、単行本『おぢさんのランプ』(有光社、'42刊)、および周辺の作品と戦時下の児童文学。近代文学研究・近代書誌学研究の方法を生かし、独自の問題設定で細かい資料操作に基づいた作品読解を展開する点に特色を持つ。〔業績〕『森鷗外『スバル』の時代』(共編著)双文社('97)『『雁』論-末造と岡田の造形をめぐって-』(『早大大学院文学研究科紀要』別冊第12集、'86)、「森鷗外『灰燼』論

「新聞への拘執を軸として」(『中京大学文学部紀要』Vol. 23. - 1. '88)、「断崖に立つ人」(『澀江抽齋』論(1)・『澀江抽齋』における「痘瘡」と「虎列拉」)(『森鷗外研究』6 所載、'95)「森鷗外と日清戦争」(連続)と「断絶」あるいは「傍観機関論争」の再検討(『講座森鷗外1. 鷗外の人と周辺』所載 新曜社、'97)【所属】日本近代文学会、日本文学協会(委員)、全国大学国語国文学会ほか

〔住所〕〒466-0834 名古屋南昭和区広路町石坂 27-1

### 酒 井 晶 代 さかいまさよ

研究者、愛知淑徳短期大学教員。文学(研究・日本近代) 1966 ~ 愛知県宝飯郡一宮町生まれ。大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程修了。教育学修士。【経歴】愛知県立大学在学中、勝尾金弥氏の下で児童文学を学ぶ。授業を通して、刈谷市出身の童話作家・森三郎氏を知り、雑誌『赤い鳥』に興味を抱く。卒業後、大阪教育大学大学院に進み、大藤幹夫氏の指導により、森三郎と『赤い鳥』に関する修士論文を執筆。大学院修了後、豊橋市で公立小学校教員を経験したのち、1992年(平4)より大阪国際児童文学館専門員として勤務し、雑誌という媒体への関心を深める。'95年より愛知淑徳短期大学専任教員となる。【業績】「森三郎童話研究-第二次『赤い鳥』との関わりを中心に」(『児童文学研究』No. 24. '92)、「明治中期における幼少年雑誌出版と地方-愛知で創刊された『益友』を中心に」(『国際児童文学館紀要』No. 9. '94)、「明治中期における幼少年雑誌出版と地方(2)-岡山で創刊された『わらんべ』を中心に」(『国際児童文学館紀要』No. 10. '95)、「もうひとつの〈東京遊学案内〉-明治20年代の

幼少年雑誌に描かれた遊学少年たち」(『児童文学研究』No. 29. '96)、「日清戦争後の〈遊学少年〉たち-雑誌『少年世界』を手がかりに」(『愛知淑徳短期大学研究紀要』No. 36. '97)【所属】日本児童文学学会・中部子どもと文化研究会

〔住所〕〒463-0017 名古屋市守山区喜多山2丁目15-10 第3長岡マンション 205

### 酒 井 萌 子 さかいもえこ

研究者、大学講師(非)。文学(研究・イギリス) 1944 ~ 岐阜県岐阜市生まれ。愛知県立女子大学文学部卒業。金城学院大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士。【経歴】大学では英文学を専攻したが、卒業後児童文学に興味を持ち、発足して数年後の日本イギリス児童文学会の会員となった。その後大学院に入り、妖精の故郷アイルランドの伝承文学を勉強してから、児童文学からは足が遠退いた。ただ、R. サトクリフの作品は、その源にケルトの意識が感じられ、強い関心を持っていた。最近では、日本ではあまり紹介されていないアイルランドの児童文学に目を向けている。長い間イギリスの植民地下にあったアイルランドでは、現在大人・子どもの分野を問わず歴史物語が盛んである。足を踏み入れるのはこの辺りからかな、と考えている。【業績】「アイルランド古代文学に現れる楽園」(『日本福祉大学紀要』No. 66. '86)、「アイルランド文芸復興期の作品 “Cuchulainn of Muirthemne” に於ける “Tàin Bó Cúailgne” の物語の再評価」(『日本福祉大学紀要』No. 78. '89)、「アイルランドのバラッド」(『中京大学教養論叢』Vol. 33-1. '92)、「R. サトクリフの再話作品について『トリスタンとイゾート』(Tinker Bell, No. 40. '95)、「〈R. サトクリフ〉の再話作品、“The Light Beyond the Forest”

について」(『中京大学教養論叢』 Vol. 38-4.  
'97) 〔趣味〕音楽観賞、山歩き 〔所属〕アイ  
ルランド文学協会、日本イギリス児童文学会  
〔住所〕〒466-0827 名古屋市昭和区川名山  
町 38-1

## 佐藤 一英 さとういちえい

詩人。文学(詩) 1899～1979 中島郡萩原  
町(現一宮市)生まれ。早稲田大学高等予科文  
学卒。〔経歴〕尾張野の知名な詩人佐藤一英  
は、古典的象徴派に属し、戦前の代表作に「大  
和し美し<sup>うるわ</sup>」「空海<sup>そらうみのたたえ</sup>頌」がある。棟方志功はこの  
版画化で識者に認められて世にでた。戦後の代  
表作は「終戦の歌-ヒロシマの瓦-」が知られる。  
児童文学との関わりは、少年少女雑誌『宝の玉』  
(新愛知新聞社、1921～24)に童謡・童話を  
『コドモの本』(朝日新聞社会事業団アサヒコド  
モノカイ、'31～42?)に童話を発表した<sup>が</sup>、  
共に未見が多く全容は分からない。児童文学の  
ルネッサンスをめざし編集した雑誌『児童文  
学』(文教書院、'31～32)は、宮沢賢治の長編  
童話の唯一の掲載誌であり、無名時代の棟方志  
功の挿絵が随所にみられる。生前の宮沢賢治の  
才能に注目した唯一の愛知県人である。なお  
「こども愛唱歌」(名古屋市教育委員会'50)に、  
佐藤一英作詩・団伊玖磨作曲の童謡「冬の夜」  
「すずめ」「オルゴールのうた」の三曲がある。  
(川出博章) 〔業績〕『新訳平家物語読本』文教  
書院('30)、『牛若物語』小山書店('36)、『日本  
神話物語』講談社('55)、『万葉物語』同('59)、  
『源氏物語』同('60)、児童文化誌『おべりすく』  
(佐藤一英特集) No. 4 おべりすく社('78)、  
『賢治・志功・一英』図録・一宮市博物館('96)  
〔所属〕中部日本詩人連盟(1959～60 委員長)  
〔参考〕日文・文化・文学

## しかた しん しかたしん

本名四方晨。作家・劇作家・演出家、日本青  
少年劇作家会議代表・(社)日本児童文学者協  
会理事。文学(創作)・演劇(劇作・演出)1928  
～ ソウル市生まれ。愛知大学(旧)法経学部  
卒。〔経歴〕1950年代の初期、名古屋上前津に  
あった、故宇野喜代三郎氏の経営する喫茶店の  
二階の屋根裏部屋。そこが戦後愛知の人形劇、  
児童文化運動の出発点であった。当時愛知大学  
の学生であった私もそこで演出・戯曲づくりの  
出発をした。故瀬尾茂氏、現在デザイナーとし  
て活躍中の宇野亜喜良氏なども、その仲間で  
あった。1957年(昭32)、市立菊里高を会場と  
して第3回の子どもを守る文化会議がひらかれ  
たが、これが愛知で自覚的に子どもの文化を運  
動として組織しようとした始めであった。私は  
事務局メンバーとして参加、菅忠道、いぬいた  
かし氏などから大きな触発を受けた。'55年ア  
ンゼルス生誕150年祭が、演出家松原英治氏  
の主唱で持たれ新村猛氏、若尾正也氏など大人  
の演劇・文学・音楽・バレエの関係者もこぞっ  
て参加。1年間にわたって公演や講演活動を行  
った。子どもの名のもとに、幅の広い芸術活  
動を行った始まりである。私は事務局長として  
参加。人形劇の丹下進氏も子ども委員として参  
加している。'67年にむすび座、'71年名古屋お  
やこ劇場、'72年に劇団うりんこが誕生。やが  
て愛知も専門劇団を中心とした本格的な子ども  
のための芸術文化の時代をむかえ、'75年には  
専門家団体を結集した愛知児童青少年舞台芸術  
団体協議会(愛児協)が組織され、年間数十万  
人の子ども観客を持つようになる。私は劇団  
「うりんこ」初代代表・愛児協の初代の代表幹  
事となる。この間、勅使逸雄を館長とした東別

院青少年会館の活動も重要であった。同会館を会場として児童文化講座を主宰した。児童文学の分野では'70年頃、原昌・北村けんじ氏と、故都島紫香氏のつくられた同人誌『中部児童文学』に加盟、'72年1月刊の『むくげとモーゼル』（アリス館）を皮切りに約50冊の創作児童文学を出版した。なお、日本児童文学者協会の理事として、主に国際関係と国内の組織関係を担当。協会50周年、「児童文学 in 沖縄」（'97）では実行委員長をつとめた。〔業績〕『国境』第1部～3部 理論社（'86～'89）、『闇を走る犬』講談社（'93）、『ふたつの太陽』国土社（'75）、『文学と演劇の間・語りが拓くもの』愛知書房（'98）〔趣味〕スキー・シュノーケリング〔所属〕日本青少年劇作家会議（代表）、日本児童文学者協会（理事）、アジア児童文学々会（共同会長）ほか

〔住所〕〒464-0031 名古屋市千種区徳川山町3-4-8

〔参考〕日文・文化・文学・作家

## 清水 美智子 しみずみちこ

愛知県刈谷市社会教育センター「母と子の図書室」読書相談員。語り 1943～ 碧海郡依佐美村大字野田字北屋敷（現刈谷市野田町北屋敷）生まれ。愛知県立刈谷北高等学校卒。〔経歴〕1967年（昭42）に第1子が生まれ、それを機に児童文学の世界に足を踏み入れた。5年後、自宅にて文庫を開設。'75年地元で児童文学サークルを結成。その年新設の刈谷市社会教育センターにて講演会を企画した。同年、同センターより「母と子の図書室」の読書指導員として採用され、週3日勤務することとなった。「母と子の図書室」は'75年に文部省が「母親が子どもに本を読み聞かせながら、本を媒体とし

てコミュニケーションを深め、その中で子どもの人間形成を図る」ことを目的とした子どもの本専門図書室である。次年度よりその主旨を果すべく、愛知県立大学勝尾金弥教授（当時）の指導を得てさまざまな企画を開設した。市民講座「お母さんの童話講座」・講演会年3回、学習会（作品研究・ストーリーテリング・ブックトーク・朗読・創作童話）、おはなし会など。現在は「母と子の図書室」の企画のほか、子育て支援活動として、東海子どもことば研究会、全国語り手たちの会、刈谷警察少年補導委員などに専念している。〔業績〕『春夏秋冬』（文芸誌）を4人で発刊（'76）、東海子どもことば研究会「子どものことばに耳をすます」〈主宰〉（'91）、刈谷文化協会「語りのアート実験劇場」〈主宰〉（'96）、「おはなし会」（毎週水曜日）紙芝居・絵本読み聞かせ・ブックトーク、「おはなし会」（毎週土曜日）紙芝居・語り・絵本朗読・ブックトーク〔趣味〕旅行・美術鑑賞〔所属〕全国図書館研究会、全国語り手たちの会（運営委員）、日本保育学会、全国子どもことば研究会ほか

〔住所〕〒448-0802 愛知県刈谷市末広町3丁目14-1

〔参考〕文化

## 鈴木 一 博 すずきかずひろ

研究者、名古屋市立北高等学校教諭。文学（研究・英米）1948～ 名古屋市熱田区五本松町生まれ。中京大学文学研究科修士課程修了。文学修士。〔経歴〕1980年中頃、「マザー・グース」の研究をその発端として、興味・関心は英米の児童文学全般にまで広がる。また東海児童文化協会および日本イギリス児童文学会の会員となり、とくに東海児童文化協会の研究誌



『児童文化』にはいくつかの論文を発表してきた。現在は、イギリスの伝承文学を研究の中心テーマにしている。〔業績〕『マザー・グースの誕生』社会思想社（'86）、「ロザモンド伝説考」（論文）（『児童文化』No. 27、'95）〔所属〕東海児童文化協会（事務局長）、日本イギリス児童文学会

〔住所〕〒456-0016 名古屋市熱田区五本松町9番9号

〔参考〕文化

### 鈴木 富次郎 すずきとみじろう

口演童話家、名古屋市教育委員会小学校巡回教室講師・全国童話人協会理事。口演童話1922～新潟県栃尾市生まれ。中部社会事業短期大学卒。〔経歴〕1946年（昭21）、名古屋市南区みどり子ども会育成指導。その間、子ども会コンクールの優勝を得る。なお、優良子ども会として、また指導者として、市、県、中日新聞社などより受賞。'50年には、南の星子ども会指導ボランティア協会を設立。この間、南区内は勿論、市内各地やときには県外まで子ども会育成指導の技術や心構えについてボランティアとして走りまわった。'52年頃には、名古屋童話協会に入会し、口演童話講師として活動をはじめ。さらに子ども会の指導者として童話を話すことが如何に大切かを痛感、各地の子ども会で積極的に話してまわった。'59年には豊明市に青い鳥幼稚園を創立し、運営にあたる。この頃幼児教育の如何に大切かを痛感。童話的メルヘンのなかで幼児のゆめを育くみ心のひろがりを育てるようはかった。'70年頃には名古屋市教育委員会「遊びの教室」童話講師として参加〔業績〕光風会展洋画部門入選「語い」（'74）、名古屋市子ども会コンクール1位「人形

劇演出」〈厚生大臣賞・中日賞受賞〉（'51）、久留島武彦文化賞（'97）〔趣味〕油絵〔所属〕名古屋市南の星ボランティア、全国童話人協会（理事）、名古屋童話協会（委員）

〔住所〕〒470-1127 豊明市三崎町ゆたか台30-1

### 鈴木 まこと すずきまこと

作家・文化活動家。文学（創作）・文化（研究・子ども集団）・放送（演出）1934～新潟県古志郡栃尾町（現栃尾市）生まれ。日本福祉大学卒。〔経歴〕1957年（昭32）中部日本放送に入社、技術、編成、制作部門に携わり、テレビCM、映画番組、ドラマ演出をする。'95年退職。放送局退職後は、地元をはじめ児童文学の普及のために図書館などの講座を引受けて文学に親しんでもらう層の拡大をはかっている。現代の情報が氾濫する社会の中で、いかにして子どもに本を読んでもらうかは至難の技のような気がする。創作児童文学に関しては'72年中部児童文学会に入会、事務局、副会長を経て現在会長を務める。子ども集団との関わりは'48年の中学二年生から現在に至まで50余年間一貫して地域子ども会の主として年少リーダーの育成に努力してきた。名古屋市内南区で始まり、千種区、県内全域、現在瀬戸市で関わっている。会員の親でつくる育成会の講師をはじめ、中学生や高校生の余暇活動としての指導には、生活環境や学歴偏重の歪みとの押し比べで、終わりが見えないたいへんな作業となっている。〔業績〕地域子ども会の育成指導（'48～）、「ある子ども会指導者の足跡」（論文）〈全国ボランティア文献賞入賞〉全国社会福祉協議会（'79）、「疎開戦争」（創作）（『中部児童文学』'89）、ラジオドラマ「もう一度逢いたい」（演出）〈第18回放

送文化賞受賞〉(岸広子作、CBC制作、'92)  
〔趣味〕 アマチュア無線 JA 2 SI (コールサイン)  
〔所属〕 中部児童文学会(会長)、日本児童文学者協会

〔住所〕 〒489-0904 瀬戸市すみれ台1-42

## 鈴木 もと子 すずきもとこ

作家。文学(創作・研究)1956～ 愛知県豊橋市生まれ。立教大学社会学部卒・愛知大学大学院文学研究科博士後期課程。満期退学。文学修士。〔経歴〕児童文学作家として、『スター誕生』シリーズ全6巻を出版。近刊『明日美のへこたれない物語』にて、第7回ちぎり文学賞激励賞受賞。愛知大学大学院研究科博士後期課程在学中に宮沢賢治を研究。作家として、また児童文学・宮沢賢治研究者、四児の母などの立場から、保育園、小中学校、図書館、PTAなどでの講演活動(子ども対象、父兄対象、あるいは両方)、市民講座・家庭教育学級の講師、教育問題シンポジウムのパネラーなどを務める。〔業績〕『スター誕生』シリーズ全6巻ポプラ社('87～'91)、『明日美のへこたれない物語』〈第7回ちぎり文学賞激励賞受賞〉('97)、「新世界への通信」(『日本児童文学』Vol. 44-1. 2. '98.)  
〔趣味〕 映画鑑賞、音楽、読書、水泳、エアロビクスほか  
〔所属〕 日本児童文学学会・日本児童文学者協会・宮沢賢治学会・中部児童文学会ほか

〔住所〕 〒441-8026 愛知県豊橋市羽根井西町12-5

## 瀬川 康 男 せがわやすお

画家・絵本作家。文学(絵本)・絵画 1932～ 岡崎市生まれ。岡崎北高等学校卒。〔経歴〕1960年(昭35)に『きつねのよめいり』を

出版以来、絵本作家としての仕事が多忙になる。'67年『ふしぎなたけのこ』でBIB世界絵本原画展グランプリ、'68年『やまんばのにしき』で小学館絵画賞、'87年『ぼうし』で絵本にっぽん大賞、講談社出版文化賞、'89年『清盛』でBIB金のリンゴ賞、'92年『絵巻平家物語』でサンケイ児童出版文化賞大賞、そのほか数々の賞を受賞した。30数年に及ぶ作家生活で、100冊以上の絵本を出版。現在は、信州の山のアトリエで、タブロー、版画、絵本の制作などにとりくんでいる。'97年より、東京都板橋区立美術館、ちひろ美術館、下関市立美術館、'98年12月より刈谷市美術館で全貌展を行っている。〔業績〕『ふしぎなたけのこ』〈第1回BIB世界絵本原画展グランプリ〉福音館書店('63)、『いないいないばあ』童心社('67)、『ぼうし』〈第10回絵本にっぽん大賞〉福音館書店('83)、『絵巻平家物語』ほるぷ出版('84-'91)、『ちょっときて』小学館('96)  
〔趣味〕 読書、薪わり  
〔所属〕 日本児童出版美術家連盟、日本国際児童図書館議会

〔住所〕 〒386-1601 長野県小県郡青木村大字田沢1209-1

〔参考〕 日文・文化・文学

## 祖父江 文 宏 そぶえふみひろ

絵本作家・演劇人、暁学園長。文学(創作)・演劇(劇作)1940～ 名古屋市生まれ。早稲田大学文学部卒。〔経歴〕早稲田大学在学中より劇団文化座演出部に所属。1963年(昭38)年3月卒業と同時に劇団群像座創立に参加。'68年4月より徳風幼稚園の保父となる。'76年3月、「お話による保育展開」で珠川賞を受賞。'79年暁学園々長。大谷保育協会の研究部長・理事。『保育相談室-障害を持つ子どもたち』(中央法

規)を再版絵本『ててて』『よるになったらおやすみなさい』『いきてるってなあに』(以上東本願寺出版'84) *DO YOU KNOW WHAT THE ROMAN GLASS IS?* (同)、「ともだち」(同'86)ほか多数を上梓した。〔業績〕絵本『ともだち』('86)、『おばあさんとうさぎたち』('89)、『かなしみの歳時記』(小説)中央法規('91)、『季節を動かす子どもたち』法蔵館('96)、『保育相談室-障害を持つ子どもたち』中央法規('98再版)、戯曲「風」('98)〔所属〕子どもの虐待防止ネットワーク・あいち(代表)

〔住所〕〒463-0004 名古屋市守山区吉根深沢 252-9

〔参考〕文化

## 高 橋 泰 市 たかはしいち

口演童話家、名古屋文化学園保育専門学校講師(非)。口演童話 1924～愛知県渥美郡渥美町山田生まれ。名古屋工業専門学校建築科卒(現名古屋工業大学)。〔経歴〕口演童話の活動の主なものは、1949年(昭24)に名古屋市教育会主催の夏休み巡回子ども会の講師として、5年間市内の小学校で活動したのが最初で、'50年に名古屋童話協会の会員となり、以後全国各所で童話を語っている。'60年に名古屋市西図書館の巡回子ども会の講師となり5年間市内の子ども会を回り、'63年から6年間愛知県教育新公開主催「童話あんぎゃ」の講師として活動、'73(昭48)年から11年間、名古屋市子ども文化研究会の顧問として市内の小学校と幼稚園を巡回したことなどがある。放送関係では'50(昭25)年から5年間NHK名古屋の子ども番組のためのサークル「名古屋少年少女放送劇作家」会員となり、放送台本の作成と出演をし、'57年から3年間NHK名古屋の「世界の童

話」の担当執筆した。ほかに、'76年から催眠プロフェッショナルや家庭教育学校講師としても活躍している。〔業績〕久留島武彦文化賞受賞('92)〔趣味〕語り〔所属〕全国童話人協会(会長)、名古屋童話協会(委員長)

〔住所〕〒455-0076 名古屋市港区川間町2-166

## 棚 橋 美代子 たなはしみよこ

研究者、中京女子大学教授。文学(研究・絵本)1944～京都市生まれ。京都女子大学家政学部・京都女子大学大学院家政学研究科修士課程修了。家政学修士。〔経歴〕1944年(昭19)1月17日、京都市に生まれる。読書を好んだが、とくに小学1年生のとき、講談社の絵本『うかれバイオリン』を読むために毎日図書館に通った記憶がある。'70年に京都女子大学大学院修士課程を修了する。以後、中川正文氏を師とし、卒業生とともに『伝統と現在』I・II(ミネルヴァ書房)に執筆。当初、小川未明の弱者に対する深い「同情」に共感を持ち、『小川未明童話論』(新評論'78)にまとめた。その後も「障害児」や女性などの弱者が、児童文学・絵本・教科書にどのように形象化されていたかをテーマに研究をすすめる。障害者差別を助長する作品であると問題になった、いわゆる『ピノキオ』問題・人種差別を助長する作品と社会問題化した、いわゆる『ちびくろサンボ』問題を取りあげたのもその延長線。文学・絵本の評価と差別をなくす運動を区別して検討すべきだという視点で、『ちびくろサンボとピノキオ』『焼かれたちびくろサンボ』(青木書店、'90、'92)にまとめた。地域の読書グループや研究会の活動にも興味を持ち、'93年刊行の『お母さんが選んだ128冊の絵本』(創元社)では、愛知県を

中心に約 300 人の参加者のまとめ役となった。そのことは、'70 年後半から '80 年代にかけて、学生とともに岐阜県徳山村のあそび・昔話の調査を行い、その結果、子ども文化を生活・子育ての中でとらえていきたいと考えたことと無関係の活動ではない。〔業績〕『小川未明童話論』新評論（'78）、『ちびくろサンボとピノキオ』（共著）青木書店（'90）、『焼かれたちびくろサンボ』（共著）青木書店（'92）、『お母さんが選んだ 128 冊の絵本』（編著書）創元社（'93）〔趣味〕編物など手芸〔所属〕日本児童文学学会（評議員）・日本保育学会

〔住所〕〒458-0031 名古屋市緑区旭出 3-318

〔参考〕文化・作家

## 中 条 雅 二 ちゅうじょうまさじ

詩人。文学（童謡作詩）1907～ 富山県高岡市生まれ。中ノ町商業実習学校卒。〔経歴〕童謡創作の揺らん期には、大西巨口、鈴木夢平などが先覚として活動した。しかし、この詩の普及振興を図る運動を起こしたのは、童謡作曲家小股久と組んで中条が発行した、同人誌「風車」の活動がこの地方では最初のものであった。運動は 2 年余りの短い期間ではあったが、最盛時は同人 22 名を数え、4 頁～6 頁のタブロイド版ながら毎月 1000 部を発行する活発さであった。廃刊したのは 1935 年（昭 10）である。以後『衣裳と暦』『紫苑』『シスターズ（ロザリオと改題）』『童話作家』『青い空』など、同人誌の発行と廃刊を繰り返してきた。'63 年、同人誌『えんじゅ』（年 2 回刊）、発行し、現在に至るまでこの詩の振興と後輩の育成に当たってきた。'66 年、信濃県信濃町柏原に童謡「一茶さん」の碑が建てられた。'74 年には中部日本放送より

「CBC クラブ文化賞」を受ける。〔業績〕「一茶さん」コロナ、ポリドールレコード中野二郎作曲（'37）、「夜更けのオルゴール」（中野二郎作曲）JOCK 放送（'56）、「中条雅二の詩による八つのバラード」（藤掛広幸作曲）チンチロリン学園初演、中電ホール（'76）、『舗道のボタン』（童詩集）詩文学社（'75）〔趣味〕音楽、絵画〔所属〕「えんじゅの会」（主宰）

〔住所〕〒453-0044 名古屋市中村区鳥居通 5-48

〔参考〕日文・文化

## 辻 真 先 つじまさき

作家・脚本家。文学・演劇・まんが 1932～ 名古屋市昭和区生まれ。名古屋大学文学部卒。〔経歴〕マンガ、アニメ、ミステリー、SF などの洗礼を、幼時居住していた名古屋の栄町界隈で受けた。これまでの仕事は、そこで触発されたものを自分なりに再構成する作業にすぎない。大学卒業までに、当時の市内映画館をすべて見尽くしたおかげで、テレビ草創期の制作演出に携わることができたし、大曽根駅構内の転轍作業にうつつをぬかしたおかげで、鉄道の紀行やミステリーが書けるというわけだ。アニメ、マンガ、ミステリーを軸に、大人が忘却しやすい若者むけのエンターテイメントを発信しつづけたつもりだが、これからは発信者の基盤となる著作権問題に、より積極的に取り組みたい。〔業績〕『アリスの国の殺人』（ミステリー）〈第 35 回推理作家協会賞〉大和書房（'81）、『デビルマン』（脚本）〈第 1～5 回アニメフェスティバル脚本賞〉東映動画（'72）、『戦国獅子伝』（マンガ原作）双葉社（'95）、『TV アニメ青春記』（ノンフィクション）実業之日本社（'96）、『サハリン脱走列車』（冒険小説）講談社（'97）

〔趣味〕旅行、映画 〔所属〕日本推理作家協会、アニメーション協会、日本放送作家協会、SF作家クラブ、冒険作家クラブ、文芸著作権保護同盟（常務理事）ほか。

〔住所〕〒107-0062 東京都港区南青山4-18  
-206

## 坪内逍遙 つばうちしょうよう

本名勇蔵のち雄蔵。小説家・評論家・翻訳家・劇作家・教育者。文学（創作、評論、翻訳、劇作）1859～1935 美濃国加茂郡太田村（現岐阜県美濃加茂市）生まれ。東京大学文学部卒。〔経歴〕近代文学誕生の原動力となった人物の一人として著名。演劇革新運動の推進者としての足跡も大きい。また、世界初の個人訳〈シェークスピア全集〉の完成者で、その改訂版『新修シェークスピア全集』の最終巻修訂中に75歳で死去。父は、尾張藩（現・愛知県）代官所の役人であった。逍遙は、『少年園』などの雑誌に論説を発表することで、明治20年代から児童文学に関わりを持ち続けるが、そのピークは1920年代前半である。東大卒業後、1883年（明治16）より東京専門学校（現・早稲田大学）で教鞭を取っていた逍遙は、1896年から1903年まで早稲田中学の教頭（後に校長）をも勤め、青少年の教育に没頭した。この時の経験が、後の児童劇への関心の素地をなす。また、この間の1900年に編集した『国語読本』は、教育界の注目を集めた。'15年（大正4）、早大を辞職して熱海に定住、文筆に専念する。民衆芸術論が高まる中、'20年にはページェント（公共劇）を提唱、次いで翌年、「文化力としての童話及び童話劇術」を発表し、〈家庭の芸術化〉を求めて、児童劇に力を注ぐようになる。以後、みずから打ち切りを決意する'24年までの間、児童劇に

についての理論的著作や脚本を多数執筆する一方、上演・実演を繰り返して、その普及に努めた。名古屋との関わりについては、1869年（明2）逍遙11歳の折、一家は名古屋郊外の上笹島町（現中村区笹島町）に移住。14歳で名古屋県英語学校（後に愛知英語学校）に入学し、18歳で卒業。上京するまでの約7年間をここで過ごしている。この間、芝居好きの母とともにときどき歌舞伎などの観劇に出かけ、これが後年の逍遙にとって重要な体験ともなった。（酒井敏）〔業績〕『当世書生気質』（小説）（1885）、『小説神髓』（評論）（'85）、『家庭用児童劇』全3巻早稲田大学出版部（1922～25）、『児童教育と演劇』（評論）同（'23）、『学校用小脚本』（脚本集）同（'23）、シェークスピア翻訳全40巻（'28完成）〔参考文献〕河竹繁俊・柳田泉『坪内逍遙』富山房（'39）、河竹登志夫「児童劇における坪内逍遙」（『総合世界文芸』16、理想社'59）、富田博之「坪内逍遙の児童劇運動」（『日本児童演劇史』東京書籍'76）

## 出村孝雄 でむらたかお

口演童話家、中日新聞社会教育講師。口演童話・文学（創作）・社会教育 1908～ 愛知県知多郡南知多町篠島生まれ。愛知第一師範学校（現愛知教育大学）卒。〔経歴〕「はなし話して70年・児童文化功労賞」受賞と『心に生きている話』出版を祝う会が1996年（平8）秋、名古屋で催された。私は'40年（昭15）に「久留島武彦文化賞」を受賞している。その久留島氏が第1回の「児童文化功労賞」の受賞者であることを知ってうれしかった。私は第35回目受賞者であった。戦時色が濃くなった'40年、10年間の教職を去って童話人としての生活が始まった。ライオン歯磨が大日本健康報国実践

会を組織、その講師に招かれて、全国各所で童話を語った。太平洋戦争開戦とともに、私は陸軍報道班員としてジャワに渡り、現地の子どもたちに童話を語った。終戦して、帰国。久留島氏に「日本は変わった。半年は講演するな、勉強せよ」と言われた。その間、話材の整理をした。中部日本放送開局、ラジオ「おはなし横町」に出演の要請を受けて、毎週、自作自演で2年ほど続けた。その話が4冊の童話集となり、カセット『はなしのおもちゃばこ』となって発売された。今も各局でときどき放送されている。現在は、中日新聞社会教育講師として、海外にも出講、最近は「童話とお母さんの会」を幼稚園・保育園で実施中である。また、名古屋童話協会長・全国童話人協会顧問、「育ての会」主幹として月刊「育ての手帖」を発行など、多くの友人に支えられて生きている。【業績】『てんぐ風』（童話集）中日新聞本社（'81）、『島の王様』同（'81）、『島っこ物語』同（'77）、『島野先生物語』同（'88）ほか、『心に生きている話』（エッセー）同（'96）【趣味】旅行、雑談【所属】全国童話人協会（顧問）、名古屋童話協会（会長）、「育ての会」（主幹）

【住所】〒464-0041 名古屋市千種区霞ヶ丘二丁目4-6-203

【参考】日文・文化

## 寺 澤 正 美 てらさわまさみ

作家。文学（創作）1928～ 丹羽郡犬山町（現犬山市）生まれ。愛知第二師範学校（現愛知教育大学）卒。【経歴】児童文学の道に入ってから20数年たつ。作品の数も少なく恥ずかしい極みだが、それでも単行本や共著・応募作品として掲載されたものをあわせると、30余冊ほどにはなる。現在は創作よりも公民館・図書館な

どの児童文学講座や創作教室、社会教育関係の講師などに時間を費やしている。また講座や教室を終えた受講生たちが、自主的に会を作り継続して活動が続けているが、その助言・指導をしたり、あるいは郷土の民話や伝説を採集し、冊子にまとめたり紹介することも、私にとっては大事な活動であり、長年続けてきていることである。1978年（昭53）に民話研究で文化奨励賞を、'87年に児童文学で文化協会賞を、安城市の文化協会から受けたのも、そんな活動が評価されたものかもしれない。あるいはもっと児童文学に励み、市の文化活動に努めよ、といった意味をこめたものであったかもしれない。いずれにしても児童文学の創作と活動は、今後も継続していく私の仕事である。【業績】『三河の民話』未来社（'78）、『とう犬ウルフ』児童憲章愛の会（'86）、『安城が原の水音』ほるぷ出版（'87）、『天竜の山に消えた少年』ほるぷ出版（'89）、『ヒグラシの鳴く山』『子とともに』児童文学賞 愛知県教育振興会（'92）【趣味】漢詩（作詩）、詩吟【所属】日本児童文学者協会、中部児童文学会

【住所】〒446-0065 安城市大東町19-6

【参考】文化・作家

## 遠 山 光 嗣 とおやまこうじ

研究者、新美南吉記念館学芸員。文学（研究・新美南吉）1971～ 半田市生まれ。龍谷大学文学部卒。【経歴】新美南吉記念館が開館した'94年（平6）に半田市の学芸員として採用され、記念館の企画展、講座、行事、資料整理、調査活動等を担当する。'97年度より、東京における南吉の足跡調査を行い、南吉の下宿先や未公開写真の発見などに成果をあげる。調査・研究活動の内容は記念館から毎年発行される研

究紀要に発表されている。【業績】「安城高女時代における南吉と病について」(『新美南吉研究紀要』No. 2. '96)、『おじいさんのランプ』の舞台はなぜ大野なのか I」(『新美南吉研究紀要』No. 3. '97)、『おじいさんのランプ』の舞台はなぜ大野なのか II」(『新美南吉研究紀要』No. 4. '98)、(調査活動) 東京における南吉の足跡調査 ('97) 【趣味】 熱帯魚 【所属】 日本児童文学学会

【住所】〒475-0917 半田市清城町1-8-1

### 戸田山 みどり とだやまみどり

研究者・大学講師(非)。文学(研究・評論) 1958～ 山形市生まれ。南山大学大学院外国語学研究科修士課程修了。文学修士・外国語学修士。【経歴】大学で英語を教えるかたわら児童文学の研究を行っている。イギリスの19世紀から20世紀半ばまでの作品をポスト・コロニアリズムの観点で読み直すことから出発して、子どもを「植民地化」する大人の欲望が児童文学にどのように反映されているか、制度としての児童文学はどのようにして成立しているのかを児童文学による教育、作品に対する検閲、評価の歴史といった大人の側の行動から読みとくことが主たるテーマである。【業績】「想像力の植民地：『ナルニア年代記』における支配と解放」(日本福祉大学研究紀要 No. 91. '94)、「「インドからきた女の子」-『秘密の花園』における植民地と子ども」(*Tinker Bell* No. 42. '96)、「“Censorship in Japan” (*Para·doxa: Studies in World Literary Genres*, Vol. 2. '96)、「犯人は誰か-ダイアナ・ウィン・ジョーンズ『わたしが幽霊だった時』を推理する」(*HYORON* 未満 No. 2 ('97)、シンポジウム「ふたたびくちびくろさんぼ」について考える」(共同提題者

'97) 【所属】 日本イギリス児童文学学会、日本児童文学学会、日本アメリカ文学学会、名古屋児童文学評論の会

【住所】〒466-0022 名古屋市昭和区塩付通  
6-47-1-201

### 中 川 達 夫 なかがわたつお

研究者、一宮女子短期大学助教授。文学(研究・イギリス絵本) 1949～ 名古屋市昭和区滝子町生まれ。慶応義塾大学卒。【経歴】児童文学の教育と研究に従事。児童文学の中でも、絵本のイラストレーションの分野の研究を行い、現在は、18世紀後半から19世紀にかけて子どもの本のイラストレーションの発達に貢献した、イギリスの木版画家トマス・ビューイックの研究をしているが、まず彼についての海外の研究書の翻訳と自叙伝の翻訳を行っている。日本ではまだよく知られていないトマス・ビューイックという人を広く紹介したい。【業績】「トマス・ビューイック自叙伝」(部分翻訳)(『一宮女子短期大学紀要』35・36集'93)、「子どもの本と印刷技術」(『一宮女子短期大学紀要』28集'89)、「外国のイラストレーションの歴史」(『児童文学世界』中教出版'91) 【所属】 日本児童文学学会、イギリス児童文学学会、絵本学会

【住所】〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町  
26-1 杵中スカイタウンB 509

### 長 松 英 一 ながまつひでかず

元名古屋大学医学部解剖学教授。組織解剖 1892～1953 東京生まれ。愛知県立医学専門学校卒。【経歴】父は17歳の時、母親を33歳で10人目の子どものお産で失い、父親も19歳の時、42歳で失った。10人兄弟の長子、一人娘

の母との結婚を本人は恋愛というのが、他人は略奪と。父親が医師で医学校の教授ということから、親族に後を継ぐよう勧められ泣く泣く医学の道に。だが文学に長じ、着想すぐれ、随筆・短歌をものにし、北原白秋に学び、また音楽を愛しフルートを独奏。ラジオに新聞に講演にその文化活動は多方面に亘った。すみれ洋裁学院の校歌を初め、2・3の学校から依頼されて作詞。中学は明倫、そして愛知県立医学専門学校を経て、九州帝国大学で助手、母校に帰って後、1923年（大12）に愛知医科大学助教授、翌年に医学博士の学位を取得、'25年から3か年間フランスを初め欧州に留学、著書は教授としての専門のものは『関節運動より見たる筋学』『横観人体解剖模型図譜』『筋学用解剖実習用図』『解剖学実習用筋表』など。専門外のものでは『佛蘭西家庭童話集』全4巻（改造文庫）、『愛の人ベートーヴェン』など。名古屋教会では万年日曜学校々長として、オルガニストとして奉仕、またあちこちの幼稚園々長として子どもの友、若者の友としての生涯であった。名古屋大学停年退職後は横浜のフェリス女学院々長として招かれ、その働きを夢に見ながら楽しみにしていたが、名古屋大学教授現職のまま61歳で他界した。45年が過ぎた今、生きていてくれたら金さん銀さんと同年、昨日のことのようにつくまここにまとめた。なお、生存中に、名古屋YMCA理事、日本基督者医科連盟会長、名古屋合唱団団長、すみれ洋裁学院理事、南山幼稚園々長、名古屋合唱団幼稚園々長、名古屋教会幼稚園理事、名古屋教会日曜学校々長、名古屋童話協会々長を歴任した。（松田一路）

〔業績〕『佛蘭西家庭童話集』全4巻（改造社）、『愛の人ベートーヴェン』

〔所属〕日本基督教団名古屋教会（長老）

## 夏 目 理知子 なつめりちこ

作家、高校講師（非）・作手村教育委員。文学（創作・手づくり絵本）1951～ 新城市生まれ。岐阜女子大学文学部卒。〔経歴〕1984年（昭59）、豊川市で手づくり絵本グループに参加。手づくり絵本の制作を始める。'87年、実妹名倉名知子と共同制作のふるさと奥三河を題材にした作品が第10回日本の絵本賞手づくり絵本コンテストで厚生大臣賞を受賞。以後、第11回、第13回の内閣総理大臣賞など、5年連続にて入賞。その後、雑誌・TVなどで制作の様子が紹介され、手づくり絵本と絵本の普及活動を展開することになった。現在は近隣地域を中心に母親グループの講師としてお母さんの心を伝える手づくり絵本のお手伝いをする一方、図書館、保育園、学校などでも児童生徒、父母対象の読み聞かせ、先生方への手づくり絵本講習、講演などを行なっている。また、声楽家である名倉とともに絵本と音楽を結んだ「おはなしコンサート」の企画、出演も手がけるなど、楽しく絵本とかかわっている。〔業績〕「おいもばたけのおたねさん」〈第10回日本の絵本賞手づくり絵本コンテスト厚生大臣賞〉（'87）、「ことしさいごのおきゃくさま」〈第11回同コンテスト内閣総理大臣賞〉評論社（'89）、「ねしょんべんたれしようすけ」〈第12回同コンテスト読売新聞社賞〉（'89）、「かえるのおへそ」〈第13回同コンテスト内閣総理大臣賞〉評論社（'92）、『やさしい手づくり絵本のつくり方』（共著）全国学校図書館協議会（'92）

〔趣味〕写真（植物）、手芸

〔所属〕すみれ手づくり絵本の会、豊橋子どもの本研究会、手づくり絵本ネットワーク、中部児童文学会

〔住所〕〒441-1422 南設楽郡作手村大字田



原字広見 16

〔参考〕文化

## 中 野 二 郎 なかのじろう

作曲家。音楽（作曲）1902～ 東春日井郡瀬戸町（現瀬戸市）生まれ。愛知県立工業学校図案科卒。〔経歴〕初月給で買ったマンドリンに魅せられて独学でマンドリンとギターを習得、大正末ごろから独奏家として活躍を始め、全国各地で独奏会を催し、レコードも発売される。自身の独奏はもちろん、主宰するマンドリン五重奏団、マンドリン楽団の演奏も、1935年頃から'64年にかけて、頻繁にラジオ放送される。'41年アルゼンチンギタリスト協会の会員に推薦される。一方作曲の分野では、ギター独奏会、マンドリン独奏曲・合奏曲、童謡などを作曲し、その数は数百曲に及ぶ。'37年、中条雅二作詞、中野二郎作曲の童謡「一茶さん」がレコード発売され、全国ヒットする。また、自作曲をイタリアで出版したり、'54年には国際ギターコンクール（イタリアギター協会）の作曲部門でパガニーニの主題による30の変奏曲が入選。'45年から20年間、NHK名古屋放送管弦楽団専属指揮者となる。'58年ギター友社よりギター音楽功労者として表彰される。同年愛知県教育委員会より文化功労者（音楽部門）として表彰される。'63年～'84年、同志社大学マンドリンクラブ講師。'81年永久にわたる優れた音楽活動により名古屋市芸術特賞を受賞。'85年には1万4千余点に及ぶ楽譜のコレクションを同志社大学図書館に寄贈。'88年勲五等双光旭日賞叙勲。'94年現代ギター社主催、日本のギター音楽振興に貢献した人に与えられるギター音楽功労賞受賞。『イタリアマンドリン百曲選』『古典マンドリン合奏曲』などを出版

し、わが国のマンドリン合奏界のレパートリーの拡大に大きな力となった。また現在も日本マンドリン連盟より『中野二郎編曲マンドリン合奏曲集』シリーズを継続出版中。〔趣味〕童画家の童画、童謡歌曲出版譜ほか 〔所属〕プレットロ ロマンティコ Plettro Romantico（マンドリン・オーケストラ）、日本マンドリン連盟（副会長）

〔住所〕〒464-0045 名古屋市千種区城山町  
2-13

〔参考〕日文

## 難 波 博 孝 なんばひろたか

研究者、愛知県立大学助教授。文学（研究）・教育（研究・国語）1958～ 兵庫県姫路市生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程・神戸大学大学院教育学研究科修士課程修了。教育学修士・文学修士。〔経歴〕もともと言語学を学んでいたが、国語教師として、中等教育の現場に出た。日々の授業のための教材研究をするうちに、今までの教材研究が、いかに学習者としての子どもたちの解釈を無視し、文学の授業さえも学習者の生活とは無関係に行われていることに疑問を感じ、国語教育の研究とともに、児童文学の世界では読み手としての子どもの解釈はどのように扱われているかをどうしても知りたくなった。こうして、児童文学研究の世界に入った。具体的な活動としては、論文執筆のほかに、小学校などでの文学の立会授業、現場の教師との勉強会や図書館や学校などでの講演会、国語教科書の編集・執筆、また自分が所属する劇団での演劇活動など、机上の空論に終わることなく、みずからが実践するものとして、児童文学研究を行っている。〔業績〕「帝国の玩具としての SAMBO -The Story of Little Black Sambo の成立当時の〈意味〉」（『児童文

学研究』No. 28. '95)、「自動化された〈物語〉から逃れるために」(『日本文学』No. 45. '96)、「読者反応とテキスト研究の必要性-読書指導研究の今後の方向性-」(『児童文学論叢』No. 2. '96)〔趣味〕演劇 〔所属〕日本児童文学学会(評議員)、全国大学国語教育学会

〔住所〕〒463-0034 名古屋市守山区四軒家  
2-601-914

### 新 居 正 子 にいまさこ

研究者、大学講師(非)。文学(研究・英米)  
1945～ 徳島県阿南市生まれ。中京大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士。〔経歴〕名古屋にあるレクリエーション関係団体で、子どもの遊びを中心とした雑誌『遊びの世界』の編集にたずさわった後、オーストラリアで、子どもの通っていた小学校で図書整理のボランティアをしたことから子どもの本に関心を抱き、中京大学大学院で英米児童文学を学んだ。現在は、中京大学ほかで英語の非常勤講師をしながら、児童文学の研究活動をしている。〔業績〕『写真で見る幼児教育の世界』(ジョイ・M・クランドール著・共訳)教育出版('82)、『『指輪物語』の中のエルフ像とその象徴的意味』*Tinker Bell*, No. 32. '86)、『名古屋の昔話-岡田弘『名古屋市区別・昔話と伝説をたずねて』考-』(『文化科学研究』Vol. 5-2. '93)〔趣味〕登山 〔所属〕日本イギリス児童文学会、東海児童文化協会

〔住所〕〒470-0115 日進市折戸町藤塚 56-292

### 新 美 南 吉 にいみなきち

本名正八(しょうはち)。作家。文学(創作・詩ほか) 1913～1943 知多郡半田町西折戸(現

半田市新生町)生まれ。東京外語専門学校英語部(現東京外国語大学)卒。〔経歴〕畳屋と下駄屋を営む兼業農家、渡辺多蔵・りゑ夫婦の次男として出生。夭折した長男と同じ正八の名を与えられる。これは講談の「梁川庄八」に因んで父が名付けた。講談好きは南吉も同様で、彼の作品の物語性の強さに影響を与えている。1917年(大正6)、母りゑ病死。'19年、父多蔵が志と再婚、同月に異母弟益吉誕生。こうした経緯と継子意識とが、南吉の作品に影響を及ぼしているとする説もある。'21年、8歳のとき、りゑの継母新美志もとと養子縁組。養家にしたのは3月ほどで、以後は生家で過ごす、戸籍上は終生新美姓であった。'26年(昭1)、半田中学(現半田高校)に進学、3年生の頃から童話・童謡・小説などを盛んに創作。村の文芸誌「オリオン」の編集に携わる一方、諸雑誌への投稿も始まった。'31年、優等の成績で卒業したが、岡崎師範の受験に失敗(体質虚弱のためと言われる)。母校半田第二尋常小学校(現岩滑小学校)に代用教員として4月から8月まで勤める。5月、童謡「窓」が『赤い鳥』に初めて掲載。7月掲載の童謡「ひる」から〈南吉〉のペンネームを使い始める。この年、終生兄事した巽聖歌が主宰する「チチノキ」に参加。南吉死後も、その仕事を積極的に世に広めた巽と知り合い、柴野民三らの知遇を得た。'32年、東京外語専門学校(現東京外国語大学)に入学。与田準一、歌見誠一らとの交渉を深める。盛んで多様な創作活動が続けるが、とくに幼年童話を集中的に書いた。'36年、卒業。貿易会社に就職するが、咯血したため11月に帰郷。挫折感、不遇感に悩む。翌年4月から7月まで、河和小学校で代用教員を勤め、恋愛も経験する。しかし、結局、南吉は独身のまま生涯を閉じた。'38

年、卒業時には得られなかった中等教員免許を取得、4月から安城高等女学校（現安城高校）教員となり、ようやく生活が安定。'42年頃までは健康にも比較的恵まれ、生徒詩集の編集や作文指導に教師としての特色を示す一方、句作・歌作を試み、盛んな創作活動を展開する。『最後の胡弓弾き』『花を埋める』（'39）などを経て、『良寛物語 手鞠と鉢の子』（学習社'41）、および『おぢいさんのランプ』（有光社'42）が刊行された。しかし、健康は次第に悪化、「狐」を書きあげた'43年1月頃には咽頭結核の症状が進み、安城の下宿から生家に戻って療養するが、2月に退職。翌3月、29歳で死去した。（酒井敏）【業績】「ごん狐」（『赤い鳥』'32、後『花のき村と盗人たち』に収録）、『おぢいさんのランプ』有光社（'42）、『花のき村と盗人たち』帝国教育会出版部（'43）、『校定新美南吉全集』全12巻別巻2 大日本図書（'80～83）【参考文献】巽聖歌『新美南吉の手紙とその生涯』英宝社（'62）、佐藤通雅『新美南吉童話論-自己放棄者の到達』牧書店（'71）、浜野卓也『新美南吉の世界』講談社（'81）、続橋達雄『南吉童話の成立と展開』大日本図書（'83）

## 西 村 滋 にしむらしげる

作家。文学（創作・ノンフィクション）1925～名古屋市東区新出来町生まれ。名古屋古新尋常小学校中退。【経歴】6歳で母、9歳で父を亡くし継母に育てられるが、その継母が去り孤児院にはいる。やがて守山の方の里親に引きとられたが、うまくいかず、戦争がはじまった頃、17歳であてもなく東京へ出る。結核の子を預かっている有隣療護院にはいり、やがて資格もないのに指導者として、働くことになる。だが敗戦となって療護院が国営となり、資格がな

いということで追放された。ただ歌う才能があったので、流しをしたりして生計を立てた。また、ちまたに流れていた戦争孤児の群にも入ったが、その後この体験が、私の文筆の原点となった。1955年（昭和30）、中央公論社より『笑わない青春の記』を処女出版、戦争孤児の青春を描いた。これがラジオ、映画、劇となり、評判となった。その後も孤児を書きつづけたが、戦争が遠くなるにつれて売れなくなり、悲惨な目に遭遇した現実を、賢治の詩のパラドックスとして、'75年に『雨にも負けて風にも負けて』を主婦之友社より上梓した。この作品により日本ノンフィクション賞を授賞。このとき作家意識がめざめ、作家への道を歩くことを決意。その翌年にはノンフィクション『お菓子放浪記』を著した。

名古屋には17歳まで居住したが、幸せな思い出はない。だが'86年から約6年間、この地方のNHK番組審議委員を務めたので、毎月のように名古屋に出た。現在は『お菓子放浪記Ⅲ』を執筆中。なお、たまたま読者の少年が不治の病で亡くなったことから、難病団体に属し、今日まで20年ほどチャリティーをつづけている。これまで良い人びととの出会いで、今日まで生きつづけている。【業績】『お菓子放浪記』理論社（'76）、『おとうさんのひとつ歌』民衆社（'80）、『母恋い放浪記』主婦の友社（'84）、『雨にも負けて風にも負けて』双葉社（'75）、『続お菓子放浪記』理論社（'94）【趣味】音楽、演劇など

【住所】〒421-2123 静岡県静岡市油山988

【参考】日文・文化・文学・作家

## 野 田 眞 治 のだしんじ

口演童話家。口演童話 1928～名古屋市守山区下志段味生まれ。愛知第一師範学校卒。

〔経歴〕終戦の翌年、敗戦の景一色の中に若い情熱は青地に白抜きの「愛知県児童愛護班」の幟に結集し動いた。県下の高専生（現各大学）で組織し、学校単位で工夫を凝らして活動した。愛知一帰は口演童話を中心にした。良き師出村先輩に恵まれたからである。奉職してから、「児童クラブ」を結成、学校も町村も越え、同志（教員・父母）相集いて夢を与える行事を催した。現在も出村孝雄氏主宰の「育ての会」に所属して子どもの事を話し合っている。〔業績〕『道草の記』（'93）、育ての会提言・発表（'68）、旭如会琵琶の普及（'95～）、愛知県教育振興会出版事業参画『愛知に輝く人々』全6巻（'80～'90）、『わらべうたのあるおはなし』全3巻（'95）〔趣味〕写真・旅行〔所属〕愛知県小中学校長会、育ての会

〔住所〕〒463-0003 名古屋市守山区下志段味字上野山1097

## 畑 中 圭 一 はたなかけいいち

研究者、名古屋明德短期大学教授。文学（研究・創作・童謡・少年少女詩）1932～ 北海道岩見沢市生まれ。京都大学文学部卒。〔経歴〕20代後半に子どものための詩、特に童謡の創作をはじめ、1965年（昭40）から'73年まで童謡誌『ちいさいうた』を主宰、20冊刊行。その間に第1詩集『王さまのあくび』（私家版、'72）を出版した。その後、同人誌『こどものうた』（'75～91）に所属、大阪弁で童謡を書き始めた。その成果を島田陽子氏との共著詩集『大阪弁のうた・ほんまにほんま』として刊行、翌年第11回日本童謡賞を受賞した。ひきつづき詩集『すかたんマーチ』『いきいき日本語きいてェな』を刊行、方言を生かした生活の詩、ことば遊びを含めたナンセンス詩などの創作をつづけてきた。

'83年から大阪国際児童文学館に勤務し、児童文学の研究にたずさわった。'91年、前年に刊行した『童謡論の系譜』で日本児童文学学会奨励賞を受賞、その後も『文芸としての童謡』『わらべ唄の詩学』（名英図書、'98）などの著書で研究成果を発表、童謡史を中心に研究活動をつづけている。なお、現在も詩誌『ぎんなん』『あ』などに所属して、童謡・詩を発表している。また近年は絵本の研究にも心を傾け、その図像学的研究の開発に努めている。〔業績〕『ほんまにほんまに』（童謡集）〈第11回日本童謡賞〉サンリード（'80）、『すかたんマーチ』（童謡集）らくだ出版（'85）、『いきいき日本語きいてェな』（童謡集）かど創房（'89）、『童謡論の系譜』〈日本児童文学学会奨励賞〉（'90）、『文芸としての童謡-童謡の歩みを考える』世界思想社（'97）〔趣味〕写真、美術鑑賞〔所属〕日本児童文学学会（理事）、アジア児童文学学会（副会長）、国際児童文学学会

〔住所〕〒456-0062 名古屋市熱田区大宝1-14-3-613

〔参考〕日文・文化・文学

## 花 井 都 茂 子 はないともこ

筆名稲本ハコ。評論家。文学（評論・日本現代）1948～ 京都府京都市東山区泉湧寺生まれ。愛知県立大学外国語学部退学。〔経歴〕私と児童文学のかかわりは、大きく3つに分かれるように思う。まずは家庭文庫「絵本館」を自宅で始めたとき。この時の乱読に近い読書量は、今の私の礎を築いてくれた。次はアリスの会。講演会を催す中でのさまざまな作家、評論家との出会いは大変な刺激であり、有形無形に評論への道筋をつけてくれた。名古屋児童文学評論の会を始めたのも、その一つである。〔業

績)『お母さんが選んだ128冊の絵本』(共編著)創元社('93)、「たかが〈少女小説〉、されど〈少女小説〉というけれど…」(『中部児童文学』No. 65.'92)、「〈あるべき〉私から〈である〉私へ」(『日本児童文学』'95)、「〈転生〉の深みにひそむもの-『ぼくの地球を守って』をめぐって」(『HYORON 未満』No. 2.'97)、「〈わかりやすさ〉ということ-『1ねん1くみ1ばんワル』をめぐって」(『HYORON 未満』No. 2.'98)【趣味】映画鑑賞、工芸鑑賞【所属】中部児童文学会、名古屋児童文学評論の会

〔住所〕〒487-0033 春日井市岩成台8丁目  
4番地の1 602号棟404号室

浜 たかや はまたかや

作家。文学(創作)1935～ 東京都目黒区祐天寺生まれ。早稲田大学文学部中退。【経歴】大学在学中は友人と同人誌を発行し、主に美術評論を発表していた。大学中退後は、神話学、民話学などを学んでいたが、自分の子どもたちに絵本、創作童話などを読み聞かせたり、いっしょに読んでいたりするうちに、児童文学に興味を持ち、1979年(昭54)頃から評論、次いで習作を始めた。'84年初めての長編作品『太陽の牙』を出版。架空の世界を舞台にしたファンタジー作品で、これが当時の日本では珍しく、第18回日本児童文学者協会新人賞、第32回サンケイ児童出版文化賞推薦を受賞する。'87年に『遠い水の伝説』を出版し、第35回サンケイ児童出版文化賞推薦、翌('88年)に『風、草原をはしる』を出版し、第19回赤い鳥文学賞、'91年に『月の巫女』を出版し、第39回産経児童出版文化賞推薦、'97年に『龍使いのキアス』を出版し、第45回産経児童出版文化賞推薦受賞。'98年2月16日に名古屋市芸術特賞を受賞

する。【業績】『太陽の牙』(第18回日本児童文学者協会新人賞)偕成社('84)、『風、草原をはしる』(第19回赤い鳥文学賞)偕成社('88)、『月の巫女』(第39回サンケイ児童出版文化賞推薦)偕成社('91)、『仮面の国のユリコ』偕成社('94)、『龍使いのキアス』偕成社('97)【所属】日本児童文学者協会、日本児童文学学会、中部児童文学会

〔住所〕〒457-0822 名古屋市南区浜田町4  
-120-2-401

〔参考〕日文、文化・作家

林 美千代 はやしみちよ

評論家、大学講師(非)。文学(評論・日本現代)1948～ 名古屋市生まれ。名古屋大学文学部卒。【経歴】子どもの頃、毎冬のクリスマスに、サンタがプレゼントしてくれた本の楽しみが、私の活動の源流にある。大人になり我が子を育てる過程で、さまざまな現代児童文学に出会い、ふたたび興味を持つようになった。託児ボランティアや障害児ボランティアなどの、子育て活動にかかわるかたわら、朗読ボランティアも経験した。いろいろな活動をしたが、学生時代に学んだ心理学を含め、私の興味関心は、この数10年一貫して「子ども」「本」「心」の周りを回り続けている。1984年(昭59)、児童文学創作団体である中部児童文学会に入会し、評論文を『中部児童文学』に発表したことは、児童文学評論を始めるきっかけとなった。評論の必要性を感じていた人達で、'89年に、名古屋児童文学評論の会を結成。児童文学評論の同人誌『HYORON 未満』を発行している。日本児童文学者協会発行の雑誌『日本児童文学』には、'91年以降、現代児童文学に関しての評論を多く掲載してきた。また、宮沢賢治・新美南

吉などの作品のテキスト分析を中心に、研究・発表を続けている。’90年より名古屋市児童図書選定協議会の委員となり、多くの児童書と接し、推薦してきた。また児童文学・絵本について、大学などで非常勤で教えている。児童文学は大人が読んでも楽しく、意味深いものが多い。そんな児童文学の魅力を、大勢の人たちと分かち合いたいと願って活動している。〔業績〕「宮沢賢治『狼森と策森、盗森』における心理学的イメージの考察」（『児童文学研究』No. 23. ’91）、「映像の文法・文学のイメージ」（『日本児童文学』Vol. 41-2. ’95）、「岡田淳作品のおもしろさを考える」（『日本児童文学』Vol. 42-12. ’96）文溪堂、「テキストの展開と接続詞-物語の流れを形作るもの」（『児童文学論叢 No. 4. ’98）〔趣味〕絵を眺めること・旅〔所属〕日本児童文学者協会、日本児童文学学会、中部児童文学会（理事・編集長）、名古屋児童文学評論の会

〔住所〕〒466-0014 名古屋市昭和区東畑町  
2-2-3

## 原 あやめ はらあやめ

筆名葉山あれ。作家。文学（創作）1947～  
瀬戸市<sup>はねだ</sup>刈田町生まれ。名古屋大学文学部卒。  
〔経歴〕35歳で児童文学を始めた。活動母体は  
中部児童文学会。同人誌掲載の主な作品は「ハ  
ナワ号進水する」「ホシくんの星旅行」「大人に  
なるってどんなこと」「ついてきちゃだめ」「お  
ばあちゃんの姫筆筒」。その他の作品では「日輪  
王伝説」「標的は優等生」などがある。『さと子  
が見たこと』講談社児童文学新人賞。途中8年  
間、愛知淑徳短大にて童話創作講座を受け持  
つ。最近『峠』に「木綿子45歳」「隣のおじ  
さん」「もと子」エッセイが数編ある。〔業績〕

『さと子が見たこと』講談社（’85）、「最後の訪  
問」（『ゆうれいの泣く学校』所載、偕成社’91）、  
「晴間夫人のおうちが焼けた」（『峠』No. 31.  
’96）、「亀山氏はきわめて多忙」（『峠』No. 32.  
’97）、「お念仏ごっこ」（『ふるさと童話館・愛  
知』所載、リブリオ出版、’98）〔趣味〕読書、  
ピアノ、オカリナ、毛糸編、創作〔所属〕中部  
児童文学会、日本児童文学者協会、同人誌  
『峠』、中部ペンクラブ

〔住所〕〒489-0876 瀬戸市白山町二丁目  
48

## 原 昌 はらしょう

研究者、中京大学教授。文学（研究・比較文  
学）1931～ 名古屋市生まれ。南山大学文学部  
卒。〔経歴〕1964年（昭39）頃より英米児童文  
学研究に従事。その成果を日本英文学会にて  
「L. キャロルのファンタジー」「A. A. ミルンに  
見るヒューモア」として発表、その翌年には雑  
誌『日本児童文学』にその内容を掲載。以降も、  
この雑誌に作品論など16編を発表。’72には、  
ジャンル別『児童文学概論』（’71）を上梓。その  
後、比較文学研究の視点を加えつつ、『児童文学  
の笑い』（’74）を著し、イギリス児童文学の伝  
統の一端を明らかにしようとした。当時の「省  
三とトム・ソーヤ」（『日本児童文学』、’76）「賢  
治とL. キャロル」（『児童文学世界』、’76）など  
は、対比研究・影響研究の一環として生まれた  
ものであった。この間『児童文芸』誌上にも、  
「アメリカのファンタジー」（’77）など5編を  
発表。なお、国外では’80、’84には米国州立ミネ  
ソタ大学のオーナラリー・フェローとして、ま  
た、’89年には台湾国立成功大学客員教授とし  
て研究活動に参加。外国誌にも異文化交流を意  
識して、“The Transformation of Gullivers

*Travels*" (Chen Kung Univ. '91)、"An International Perspective on Japanese Children's Literature" (Simon Fraser Univ. '93) ほかを  
発表。'91 には比較・対比研究の一部をまとめて、『比較児童文学論』として上梓。なお、学会活動では、'76 年より日本児童文学学会理事、'85 年から '92 年まで日本イギリス児童文学会々長を務め、学会賞選考委員ならびに編集委員、国際グリム賞選考委員などを歴任した。地域活動では、'64 年から '68 年まで中部児童文学会々長を務め、その後東海児童文化協会の結成に参加、'86 年より会長を務めている。【業績】『児童文学概論』(福田清人共著) 建帛社 ('71)、『児童文学の笑い』〈第 9 回新美南吉文学賞〉牧書店 ('74)、『比較児童文学論』大日本図書 ('91)、『児童文学へのいざない』建帛社 ('89)、『ミルン自伝・ぼくたちは幸福だった』(梅沢時子共訳) 研究社 ('75) 【趣味】旅 【所属】日本児童文学学会 (理事)、日本イギリス児童文学会 (理事)、日本児童文芸家協会 (評議員)、国際児童文学学会、東海児童文化協会 (会長)

【住所】〒466-0033 名古屋市昭和区台町 2  
-8

【参考】日文・文化・文学・作家

## 平 松 哲 夫 ひらまつてつお

作家、文化センター講師。文学 (創作) ・放送 (ラジオ・TV 番組) 1947 ~ 一宮市光明寺生まれ。滝高校卒。【経歴】1978 年 (昭 53) 異色童話集「一番星にいちばん近い丘」にて、第 11 回新美南吉文学賞受賞。その後、昔話の採集再話に独自の作法を確立し新聞連載を開始。'80 から '97 年まで、東海ラジオと FM 静岡にて、ドラマ仕立ての昔話を放送。好評を得て、

レギュラー解説出演する。'88 年から、全国放送テレビ「まんが日本昔ばなし」愛知県担当執筆。名古屋テレビ「歴史ウォッチング」にシナリオと解説出演。名古屋 CATV スターキャット「郵便局発 YOU & I こどもランド」を長期執筆。プロデュースによる入賞は、'91 年度日本民間放送連盟大賞。'94 日本福祉大学芝居コンクールなど。講演と口演は '81 年から東海三県を中心に 400 回以上、観客動員延数 20 万人。現在「民話ドラマの書き方」を熱田の森文化センターや公共施設で講座開催。クローバー CATV 「お話の玉手箱」の解説出演中である。【業績】東海ラジオ「ぶっつけワイド・わがまのむかしばなし」〈脚本と解説〉('70 ~ '97)、TBS 系テレビ全国放送「まんが日本昔ばなし」愛知県担当執筆 ('88 ~ '94)、「マンガアニメ・いちのみや昔ばなし」(映画脚本) ('91)、『東海むかしばなしの旅』風媒社刊 ('93)、「一番星にいちばん近い丘」〈第 11 回新美南吉文学賞受賞〉('78) 【趣味】早朝ソフトボール 【所属】中部児童文学会 ('89 ~ '91)

【住所】〒491-0135 一宮市光明寺本墮落  
44-4

【参考】文化

## 福 永 冷 三 ふくながれいぞう

作家。文学 (創作) 1928 ~ 名古屋市東区長久寺町生まれ。早稲田大学文学部国文科卒。【経歴】名古屋で生まれ、中学の卒業時まで生活していたが、戦災により故郷をはなれることとなった。小学校は、東区白壁小学校を 1941 年 (昭 16) に卒業。愛知県立明倫中学校 (旧制) へ入学。中学 4 年生より、大隈鉄鋼所上飯田工場に学徒動員として 1 年間勤務。'45 年 (昭 20) 春、第 2 早稲田高等学院へ合格。その後、3 度

の戦災により滋賀県藩生郡朝日野村の父の故郷へ疎開。’45年秋、早大授業再開をうけ、東京へ下宿。その後、名古屋と縁を失った。病弱な父は、名古屋を去って、熱海市の現住所に住み、以後、私の熱海での生活がはじまり、現在に至っている。〔業績〕『クレヨン王国の十二月』講談社（’80）、「クレヨン王国」シリーズ38冊講談社（’86～’98）、アニメ化（’97～）、『おしゃべり三人少女湖のひみつ』金の星社（’87）、『ほしがりのサンタさん』（絵本）サンリオ（’88）、「夢のクレヨン王国」放映（’98）〔趣味〕散歩・自然観察〔所属〕日本文芸家協会〔住所〕〒413-0029 静岡県熱海市小嵐13-7〔参考〕日文・文化・作家

#### 藤 真知子 ふじまちこ

本名加藤。作家・詩人。文学（創作・詩）1950～ 東京都新宿区生まれ。東京女子大学文学部卒。〔経歴〕1985年（昭60）第1回ポプラ社「子どもの文学」に『まじょ子』で入選、出版。「まじょ子」シリーズは、現在既刊25冊、続刊中。’87年より「わたしのママは魔女」シリーズを執筆、既刊22冊、続刊中。その他の著書として、『こんにちは！ふしぎ日和』（’93）、『ゴロンちゃんのどきどきクリーニング屋さん』（’94）、『お花のプリンセス ミモレひめとデモレ姫』（’95）、『学校おばけの音楽会』（’97）をPHP研究所から、また、「五つ子ちゃん」シリーズ全3巻（’92-’93）、「鏡の中の魔法使い」（’96）、『まじょのケーキやさん、おねぼうパイとおはようケーキ』（’95）、『じどうしゃカーくん』シリーズ既刊2巻（’97）、「まほうつかいマホタン」（’98）を、ポプラ社から発刊。ほかに、『いたずらまじょ子のゲームブック』、アマダよ

りの「まじょ子」のビデオ3本の監修、第36回「かんぽ作文コンクール」東海地方審査委員、「中電防災全国児童文学コンクール」審査委員など。その他、自作朗読として、「ファンタジーの音楽会」（藤真知子原作、伊藤安信作曲）を’98年6月ピアノ曲バックに、12月オーケストラをバックに発表。’87年より、児童文学グループ「ユニコーン」を主宰（’90年より、同人誌『ユニコーン』を毎年発刊、現在9号に至る）。’95年発足時より、東海少年詩研究会会員。（同人誌『まんなか』に毎号、少年詩を発表）’96年より、日本児童文学者協会会員。〔業績〕「まじょ子」シリーズ、ポプラ社（’85～）、「わたしのママは魔女」シリーズ、ポプラ社（’87～）、『鏡の中の魔法使い』ポプラ社（’96）、『学校おばけの音楽会』PHP（’97）、「ユニコーン」主宰（’87～）〔趣味〕華道・日舞〔所属〕ユニコーン、東海少年詩研究会、日本児童文学者協会、愛知芸術文化協会〔住所〕〒467-0059 名古屋市瑞穂区軍水町2-35-1〔参考〕文化・作家

#### 藤 森 かよこ ふじもりかよこ

研究者、桃山学院大学教授。文学・演劇・映画（研究）1953～ 名古屋市昭和区川名新町生まれ。南山大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。文学修士。〔経歴〕文学は、良きにつけ悪しきにつけ社会体制の維持を目的とするイデオロギカルな装置である。「マインド・コントロール」を最も有効に、「自然に」する。「だまされてはいけない！」この認識を土台にして、フェミニズムとジェンダーの観点から、アメリカ文学作品に関する論文を発表してきた。女性に不利益な言語表現、性差がもたらす不利



益には敏感である。階級や人種の問題も論じたいが、現状では、これらの問題は視野に入れるだけにとどまっている。研究経歴としては、マーク・トウェインから始めた。さらに白人中心文学産業における商品としての児童文学生産戦略の観点から、バージニア・ハミルトンの作品分析、および反フェミニズム的読者も取り込むスー・ハリソンの著作分析、『魔女の宅急便』の原作とアニメ比較に、『もののけ姫』批評もした。影響力が強いアニメ映画には大きな関心がある。〔業績〕「Huckleberry Finn と詐欺師たち」(『アメリカ文学研究』No. 22. '86)、「不在の少女たちからのメッセージ」(『児童文学研究』No. 25. '93)、「フェミニズムから見る『魔女の宅急便』」(『児童文学研究』No. 27. '94)、「物語もリサイクルしましょう…が…」(『日本児童文学』Vol. 43-3, 4. '97)、『抵抗する読者』(ジュディス・フェットラー著、鶴殿えりか共訳)ユニテ ('94)〔趣味〕絵画(描くこと)、旅行〔所属〕日本児童文学学会、日本アメリカ文学会、日本英文学会、日本女性学会、日本比較文学会、日本アメリカ学会

〔住所〕〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町47-147 サザンヒル八事2-605

## 舟 橋 齊 ふなはしひとし

研究者、聖母女学院短期大学教授。児童文化(研究)・教育(幼児) 1941～ 小牧市生まれ。南山大学文学部卒。〔経歴〕教育学を中心に、幼児教育学と子ども文化論を専攻し、1966年(昭41)から'78年まで、名古屋自由学院短期大学で、さらに'78年から'94年まで、大垣女子短期大学に在職。その間の'74年から'87年まで、東海児童文化協会の会員として、東海地区の子どもの文化の研究と文化活動にかかわっ

た。子どもの発達と教育を基底に子どもの文化を構造的視点から支え、発展への努力をした。とくに、東海児童文化協会の機関雑誌『児童文化』17号(86)と、この雑誌を基に開催された「児童文化講座」で提言し、その後も、日本保育学会などで継続して問題提起してきた「子どもの生きる力」と「文化力」の重要性が、中教審でも取りあげられ、新教育要領にももりこまれたことは、一定の成果と考える。なお、'94年以降は、京都の聖母女学院短期大学で、児童文化や幼児教育を中心に講義を担当し、地域社会での子ども文化活動に従事している。〔業績〕『絵本、エホン、ご本、ゴホン』法政出版('96)、『絵本の住所録』法政出版('93)〔趣味〕山野草鑑賞、ウォーキング〔所属〕日本教育学会、日本保育学会、元東海児童文化協会(副会長)

〔住所〕〒520-0533 滋賀県滋賀郡志賀町小野朝日2丁目17-6

〔参考〕文化

## 堀 尾 幸 平 ほりおこうへい

作家・劇作家、愛知淑徳大学教授。文学(創作・研究)・演劇(脚本・演出) 1935～ 西尾市生まれ。愛知学芸大学(現愛知教育大学)卒。〔経歴〕国民学校(小学校)3、4年の頃から自作の絵本・紙芝居・ひとり芝居などを同級生や地域で披露して好評を博したことで病みつくなり、新制中学校で人形劇クラブの部長として活躍した。愛知教育大学在学中は児童文学部に所属、県内の小中学校を巡回した。'86年(昭61)、愛知学生児童劇研究会を発足させ、原昌氏とともに中京大学、愛知淑徳大学などの学生の指導に当たった。'70年から児童演劇にかかわり、ななし座、なかよし劇団を経て、'90年に子どもミュージカル劇団たんぼぼを創立。主宰・脚

本・演出の三役で「森は生きている」「うりこひめ」「桜姫異聞」などを世に送った。児童劇団脚本「ガララに盗まれた神の笛」では第9回新美南吉文学賞を受賞した。児童文学関係では、中日新聞連載小説の単行本『太郎樹』、『少年之玉研究』『日本児童文学論』など、実作と理論の両面から活躍している。また勤務大学や文化センターでの創作童話講座で後進の育成に当たっている。〔業績〕『太郎樹』中日新聞社（'79）、『少年之玉研究』中部日本教育文化会（'80）『日本児童文学論』中部日本教育文化会（'91）、「評伝新美南吉」（『景象』Vol. 5-1, Vol. 6-1、'93〜'94）、「桜姫異聞」（子どもミュージカル）脚本・演出（'97）〔趣味〕写真、料理〔所属〕日本児童文学学会、日本児童文学者協会、東海児童文化協会

〔住所〕〒457-0032 名古屋市南区元桜田町4-55

〔参考〕日文・文化

## 松 原 喜久子 まつばらきくこ

作家。文学（創作）1938〜 旧満州国撫順市生まれ。愛知学芸大学（現愛知教育大学）卒。〔経歴〕自分の子どもを育てる中で出会った児童文学を書き続けて、30年余りになる。時流に迎合することを避け、伝承の必要を感じながら書いてきた。書く姿勢としては、声高にならないで、マニュアル万能の時代を迎え、そのすき間を埋めることを心がけている。時折り、話す機会を得るだけで、外への働きかけには欠けるが、創作のみが活動の場になっている。なお、著作のなかで『鷹を夢見た少年』（1993）は名古屋市児童図書選定協議会選定、『おばあちゃんのひみつ』（'97）は第7回東海地区読書ゆうびんコンテスト指定を受けた。〔業績〕「海に

送った日」（『わすれられない友だち』所載、偕成社、'74）、『ふるさとの民話、愛知県』（共著）偕成社（'78）、『鷹を夢見た少年』文溪堂（'93）、『おばあちゃんのひみつ』K・T・C中央出版（'97）、『おひさまのひみつ』K・T・C中央出版（'98）〔趣味〕音楽鑑賞・絵画鑑賞〔所属〕中部児童文学会、日本児童文学学会中部例会

〔住所〕〒462-0837 名古屋市北区大杉二丁目2-2

〔参考〕文化

## 丸 山 薫 まるやまかおる

詩人、元愛知大学教授。文学（詩）1899〜1974 大分市生まれ。東京大学文学部中退。〔経歴〕丸山薫は12歳で父を失い、以後の少年期を母の郷里である豊橋市ですごした。県立第四中学（現時習館高）を卒業後、三高を経て東大国文科に在学。この頃から詩作をはじめ、1934年（昭和9）には三好達治らと詩誌『四季』を創刊、生涯にわたって詩作をつづけた。'37年頃からは少年少女詩を『少女の友』『コドモノクニ』などに発表。'45年から3年間山形県に疎開して小学校教員をつとめたが、その時に生まれた少年少女詩を中心に詩集『青い黒板』が'48年に出版されている。'48年、山形県から豊橋市に帰住。翌年から愛知大学講師、のちに教授となる。'50年代なかばまで『少年クラブ』『少女クラブ』などに少年少女詩を発表し、少年少女向けに『新しい詩の本』という解説書も著わした。中部日本詩人連盟（のちに中日詩人会）の委員長をつとめるなど地域文化の発展にも貢献し、'54年に豊橋文化賞、'57年には中部日本文化賞を受賞した。（畑中圭一）〔業績〕『青い黒板』（少年少女詩集）ニューフレンズ（'48）、『新しい詩の本〈小学生全集17〉』筑摩書房

(’52)、『ヤシノミノタビ〈新日本幼年文庫〉』帝國教育会(’42)、『丸山薫全集』全5巻 角川書店(’76) **〔所属〕**『四季』(同人)、中日詩人会  
**〔参考〕**文化

## 水 谷 京 みづたにたかし

詩人。文学(童謡)1909～1976 名古屋市生まれ。**〔経歴〕**1932年(昭和7)頃から大関五郎の指導を受けて創作童謡を書きはじめ、その大関五郎を介して知った中条雅二の影響で童謡を書きだした。以後、中条とともに童謡誌『紙芝居』『風車』『衣裳と暦』『紫苑』の同人として数多くの童謡を創作・発表した。とくに『風車』のグループは’33年から2年間、童謡立体化運動の先駆として活動したが、水谷は中条とともにその中心となって活躍した。’41年には大阪童謡芸術協会に活動の場を移し、戦後はふたたび名古屋で中条とともに『槐(えんじゅ)』を創刊した。初期の水谷は幼児を対象とした「保育童謡」を数多く生み出したが、戦後はみずからの幼少年期を回想した童謡が多かった。民謡を創作の起点としていただけに、音数律にはつよいこだわりがあり、なめらかなリズムをもった童謡が多い。「おしくらわっしょい」など、レコード化された童謡が30余篇(曲)ある。(畑中圭一) **〔業績〕**『飛騨はふるさと』(民謡集)冬至書房(’65)、『こぶしの花咲く道』(童謡集)関西歌謡集団(’71)、『友だちが呼んでいる』(童謡集)関西歌謡集団(’71) **〔参考文献〕**中条雅二「水谷京の足跡」I～VI(『えんじゅ』No.28～33. ’79～’82) **〔所属〕**「風車」(同人)、大阪童謡芸術協会

## 三 宅 千 代 みやけちよ

歌人・作家。文学(児童短歌)1918～ 名古屋

屋市西区江川町(現花ノ木町)生まれ。東京女子大学国文科卒。**〔経歴〕**まず子供短歌結社「白い鳥」について記しておく。1975年(昭和50)、初孫娘(小1)に短歌を教えたのが始まりだった。やがて兄弟いとこ友だちたちが集まった。『白い鳥』と名づけ1ヶ月に1度わが家で歌会をする事になる。’82年に『白い鳥総合歌集No.1』を刊行。’84年、『白い鳥』隔月出版を開始。同人全国に至る。’88年には『総合歌集No.2』を発刊。子どもたちは積極的に作歌に挑みいろいろな大会で入選。『白い鳥』発足以来20年以上たった。歌集4冊刊。席をおいた同人数93人。だが彼らは高校受験大学受験に直面していた。やがて私は受験地獄の子どもたちに、これ以上作歌を強要することがどうしてもできなくなった。辛い決意の末’97年(平9)3月『白い鳥』を終刊した。子どもたちの作った5冊の個人歌集がある。幼年期作歌をはじめ長年続けた精神の軌跡である。おそらく日本にはない実験的価値をもつ歌集であろう。彼らの精神は必ず得難い何かを獲得したはずだと思う。**〔業績〕**「白い鳥」と名付けた短歌指導(幼稚園児より高校生まで、’75～’97、白い鳥の歌集9冊刊行)、『夕映えの雲』(小説)〈第19回新美南吉文学賞〉朝日新聞名古屋本社(’82)、第5歌集『冬のかまきり』〈日本歌人クラブ賞〉短歌研究社(’89)、第6歌集『宇宙の塵』短歌研究社(’95)、第7歌集『鴉のくる家』短歌新聞社(’97)、〈名古屋市芸術賞特賞受賞〉(’94)、〈第7回中部日本歌人会梨郷賞〉(’97) **〔趣味〕**読書、散歩 **〔所属〕**歌誌「礁」(編集委員)、「核」、文芸誌「文芸シャトル」(事務局)、中日歌人会、中部ペンクラブ、日本歌人クラブ、日本ペンクラブ、文芸家協会

**〔住所〕**〒463-0011 名古屋市守山区小幡北

山 2758 - 576

〔参考〕文化

### 三 輪 弘 忠 みわひろただ

作家・教育者。文学（創作）・教育 1856 ～ 1927 渥美郡豊橋関屋町（現豊橋市関屋町）生まれ。愛知県教員養成学校（現愛知教育大学）卒。〔経歴〕1856 年（安政 3）9 月 30 日、渥美郡豊橋関屋町（現豊橋市関屋町）に生まれる。愛知県教員養成学校（愛知教育大学）を卒業後、三河地方の小学校や県立宝飯中学校などに勤務。'90 年（明 23）11 月、『大日本教育会雑誌』の少年書類懸賞に応募、入選した『少年之玉』全 5 巻を名古屋の鬼頭平兵衛本店から出版した。この『少年之玉』によって、わが国の児童文学は出発・発祥したといえる。つまり「児童のための文学」という創作理論をおさえて、ストーリー、題材、表現など、児童の発達段階に密着させるために、草稿ができると、児童の前で朗読・さし絵も見せて、児童の反応を確かめて書き進めた。ストーリーは、三河出身の模範少年・水田国吉が、忍耐と努力で苦学してサンフランシスコにわたって修業、帰国後、電灯会社を興して成功するという立身出世もの。構成や物語展開もダイナミックで一気に読ませる迫力をもっている。その後、三輪は、愛知県視学になるが、49 歳で教職から引退して実業界に転身。電陶事業の会社を興して成功する。奇しくも自作「少年之玉」のストーリー通りの人生を歩んだ。したがって創作はこの「少年之玉」1 作だけで終わってしまったのは草創期の日本児童文学界にとっても大きな損失であった。'27 年（昭 2）12 月 5 日、肝臓ガンのため名古屋市東区大曽根町の自宅で波乱に富んだ 71 歳の生涯を閉じた。墓は豊橋市花園町の応通寺にある。

（堀尾幸平）〔業績〕『少年之玉』（全 5 巻）鬼頭平兵衛本店（'90）

〔参考〕日文・文化・文学

### 武 藤 清 吾 むとうせいご

研究者、春日丘高等学校教諭。文学・演劇（研究）1954 ～ 岐阜県羽島市小熊町生まれ。京都大学教育学部卒、神戸大学大学院総合人間科学研究科修士課程修了。学術修士。〔経歴〕地域児童文学誌『コボたち』の編集に従事しながら、戦争を題材とした児童文学の創作の問題を、今西祐行・長崎源之助・三木卓・しかたしんらの作品をもとに評論・研究してきた。また、変貌の激しかった'80 年代の児童文学時評や「私」を描く児童文学に現れた「仮面」の問題の研究に加え、主に幼年童話の創作、地域劇団の演劇脚本も手がけた。近年は、1910 ～ 20 年代の童話、なかでも芥川龍之助の童話や小説についての研究成果を発表している。〔業績〕「戦争・ことば・児童文学」（『教育』No. 543. '91）、「三木卓『ほろびた国の旅』の文学空間—自己批評の内在律としての〈満州〉」（『児童文学研究』第 28 号 '95）、「芥川龍之助が描いた少年少女—『トロッコ』と『少年』の世界」（『児童文学論叢』No. 4. '98）、「勾王・伝説 1993」（脚本）（1993 年 5 月 16 日公演、羽島市民会館）、「ひかりのくにのジル」（創作）（『なにやっとの』No. 17 ～ 22. 連載 '96 ～ '98）〔趣味〕山歩き、演劇 〔所属〕日本近代文学会、日本教育学会、日本児童文学者協会、日本児童文学学会、日本文学者協会、全国大学国語教育学会、名古屋児童文学評論の会

〔住所〕〒501-6274 岐阜県羽島市小熊町西  
小熊 1375-1

## 森 三 郎 もりさぶろう

作家。文学（創作）1911～93 碧海郡刈谷町（現刈谷市）生まれ。亀城小学校高等科卒。〔経歴〕長兄の森銑三に導かれて、少年時代から『赤い鳥』を愛読。『童話』や『金の船』に創作童話や綴方を投稿する。高等小学校卒業後の1925年（大正14）には上京して、川上貞奴が設立した川上児童楽劇団に入団。約5年間に在籍し、童話劇などの舞台に立つ。’31年に復刊された第2次『赤い鳥』に、「赤穴宗右衛門兄弟」（「茅原順三」名義で’31年3月号に掲載）が採用されたことから、鈴木三重吉の知遇を得て同誌に多数の作品を執筆。翌’32年夏以降は、『赤い鳥』編集にも従事し、晩年の三重吉を支えることとなった。同誌への執筆は6年足らずの間に100編以上を数え、その約半数は変名で発表されている。古典再話から伝記、生活童話まで多岐にわたる作品群は、三重吉の内弟子として、また編集者としての立場を如実に反映し、復刊後の同誌の状況と強く結びついたものであった。『赤い鳥』終刊後は、新美南吉や平塚武二らとともに同誌出身の新人作家として注目され、戦中から戦後にかけて6冊の童話集を刊行。戦後は刈谷で過ごし、雑誌『銀河』や『少年少女』などへの執筆、放送童話などに活動の幅を広げるが、’60年前後を境に童話執筆から遠ざかり、以後「私の記者時代」（『赤い鳥代表作集・後期』所載 小峰書店、’58）など、『赤い鳥』の証言者として論文や随筆を多数発表している。読者、作者、編集者と多面的な視点を有するそれらの証言には、『赤い鳥』研究上、貴重なものが多い。（酒井晶代）〔業績〕『昔の笑ひばなし』中央公論社（’42）、『かさゝぎ物語』帝国教育会出版部（’42）、『うぐひすの謡』拓南社

（’43）、『雪こんこんお寺の柿の木』泰光堂（’43）、『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』東京一陽社（’49）〔参考文献〕酒井晶代「森三郎・人と作品～『赤い鳥』との関わりを中心に～」、「森三郎略年譜」（刈谷市教育委員会中央図書館編『森三郎童話選集 かさゝぎ物語』所載’95）、平井芳男「郷土の『赤い鳥』童話作家森三郎」（刈谷市郷土文化研究会々誌「かりや」No. 18. 所載’97）、平井芳男「故郷視点からの森三郎戦後著作」（刈谷市郷土文化研究会々誌「かりや」No. 19. 所載’98）〔所属〕日本児童文学者協会〔参考〕日文・文化・文学

## 森 銑 三 もりせんぞう

人物研究家・書誌学者。人物研究（日本近世）・書誌学 1895～85 碧海郡刈谷町（現刈谷市）生まれ。文部省図書館講習所卒。〔経歴〕児童向き著作の嚆矢は、1920年（大正9）に刊行された伝記叢書〈日本少年文庫〉とされる。渡辺崋山、松本奎堂など郷土・三河出身の人物の生涯を平易な文章で描いたこのシリーズは、『赤い鳥』誌上で鈴木三重吉から絶賛された。この出会いが縁となり、’27年（昭2）から翌’28年にかけて「伊藤圭介の話」をはじめ、同誌に9編の伝記を発表しているほか、前後して雑誌『子供の科学』にも江戸時代の科学者たちの伝記を執筆。後者はのちに加筆されて『おらんだ正月』（富山房’38）にまとめられている。児童向き著作としては、さらに古典再話の系譜があり、戦中から戦後にかけて、「唐代小説」などから空想的な物語を再話した『支那童話・瑠璃の壺』（三省堂’43）や、「御伽草子」の再話集『中納言の笛』（青雲書院’48）が刊行されている。近世学芸史や書誌学研究の分野での超人的な執筆活動の傍ら、児童書への関心と熱意は晩年ま

で衰えることなく、'78年には雑誌『子どもの館』に「孔子様の馬」を連載。'82年にはこれらの再話を集大成した『瑠璃の壺・森銑三童話集』（三樹書房）が出版された。少年時代から書物に親しみ、青年期に、名古屋市立図書館と刈谷町立図書館での勤務や、刈谷および高崎での小学校代用職員の経験を通して、児童書や子どもへの愛情を育んでいった様子、児童文学史における作品の位置付けについては、勝尾金弥『森銑三と児童文学』（大日本図書'87）に詳しい。（酒井晶代）【業績】〈日本少年文庫（叢書）〉第1編『渡辺華山』大道社（'20）、『おらんだ正月-科学者達-』富山房（'38）、『物語塙保己一』三国書房（'42）、『支那童話・瑠璃の壺』（池田孝次郎、柴田宵曲共著）三省堂（'43）、『瑠璃の壺・森銑三童話集』三樹書房（'82）【参考文献】勝尾金弥『森銑三と児童文学』大日本図書（'87）、『森銑三著作集』全12巻、別巻1 中央公論社（'70～'72）、『森銑三著作集続編』全16巻、別巻1 中央公論社（'92～'95）

〔参考〕日文・文化・文学

## 森 たかみち もりたかみち

詩人。文学（童謡）1908～ 名古屋市生まれ。愛知高等小学校卒。【経歴】高等小学校在学中に名古屋の児童文芸誌『兎の耳』に俳句・短歌・詩などを投稿し、その秀でた才能を認められた。さまざまな職業を体験しながら、1924年（大正13）からは森はたるの筆名で『赤い鳥』『金の星』に童謡を投稿、しばしば入選して北原白秋に「嘱望の一人」として期待された。'35年頃、大阪に居を移し、大阪童謡芸術協会の『童謡芸術』誌上で活躍。そのほか『生誕』『昆虫列車』『お話の木』『綴方倶楽部』など、さまざまな雑誌に作品を発表した。大戦後は短歌や小説

に力を注いだが、'60代からふたたび童謡の創作にも心を傾けている。森の童謡は題材への密着度が高く、また対象に迫る独自の視点がある。そのために月や花、風景などをうたった叙景の歌でも、そこにおのずから森の体温が感じられる。たとえば代表作のひとつである「樺太」には樺ダラを干している北国の漁村がうたわれているが、対象のとらえ方が的確で、そのイメージは鮮烈である。また「谷間の月」「もやの中」「馬洗い」などにうたわれた肉体労働者の父、そのたくましい裸は、幼児期に両親と離別した森自身の父性への憧憬が生み出したものであろうが、童謡にはめずらしい骨太のイメージである。なお森は鋭い音感・リズム感の持ち主で、作詩の際に3拍連続あるいは4拍連続（たとえば「朝陽の中の祭」）という音数律を用いたり、さらにはみずから数多くの作曲を手がけたりしている。（畑中圭一）【業績】『朝陽の中の祭』（童謡詩集）大阪童謡芸術協会（'42）、『裸の神さま』（童謡詩集）同（'71）、『森たかみち童謡集』私家版（'83）、『大きな暖い手』同（'77）【参考文献】森たかみち『詩と生きる』シルバー福祉事業協会（'90）【所属】大阪童謡芸術協会ほか

〔参考〕日文・文化・文学

## 矢口 栄 やぐちさかえ

研究者、新美南吉顕彰会事務局長。文学1935～ 群馬県生まれ。愛知学芸大学卒。【経歴】1962年（昭37）より日本児童詩教育研究所に所属し、新しい日本の児童詩を求めて、主体的児童詩の研究、開拓、指導に当る。現在は児童詩研究会に所属し、児童詩を中心に詩の研究に当たっている。主体的児童詩実践賞受賞（'65）。'86年より新美南吉研究会に所属し、南

吉と南吉文学の研究に当る。'96より新美南吉記念館で新美南吉顕彰会の事務局を預かり、南吉の顕彰と合せて、南吉の詩を中心に南吉文学の紹介に当たっている。〔業績〕『詩の鑑賞指導』（共著）少年写真新聞社（'71）、『新しい詩の創作指導』（〃）明治図書（'76）、『ことば教育』（〃）筑摩書房（'81）、『子どもたちに贈りたい詩』教育出版センター（'95）、「南吉の残した童謡と詩-その魅力-」（『新美南吉記念館研究紀要』'97）〔趣味〕読書、音楽鑑賞、ゴルフ、テニス、スキー〔所属〕児童詩研究会、新美南吉研究会

〔住所〕〒475-0082 半田市前田町19

〔参考〕文化

## 矢 崎 藍 やざきあい

作家、桜花学園大学教授。文学（創作）1940～東京都生まれ。お茶の水女子大学国文学部卒。〔経歴〕1962年（昭37）小学館に入社、児童雑誌を編集。豊田市に移り'74年に雑誌『のびのび』（朝日新聞社）に「PTA 太平記」を連載。'80年に短編小説集『ああ子育て戦争』を出版しベストセラーになる。以後、核家族状況の親子と学校周辺を取材して新聞、雑誌に文筆活動。テレビ出演、講演などでも発言。『小説母親の条件』『幸せくらべ』（学陽書房）の3部作で、いじめ、校内暴力、登校拒否、家庭内暴力、体罰などについて問題提起。また『思春期ときめきヒジョーシキ』は朝日新聞の連載コラムをもとに思春期の心を子ども自身、親、社会の中で描いたエッセイ集。そのほか児童書に現代の学校の4年生、5年生を主人公にしたユーモア小説『チャーリー！』『チャーリーと鯖猫』がある。'93年『いまだき子どもの親講座』では、愛知県立大学名誉教授山田正敏氏と現代社会の子

育てを考える。なお共著に『同時代子ども研究』（新曜社）『いじめ』（朝日新聞社）などがある。〔業績〕『ああ子育て戦争』学陽書房（'80）、『思春期ときめきヒジョーシキ』学陽書房（'87）、『チャーリー！』筑摩書房（'89）、『チャーリーと鯖猫』筑摩書房（'91）、『いまだき子どもの親講座』NHK出版（'93）〔趣味〕連句〔所属〕俳文学会、連句協会（理事）

〔住所〕〒471-0822 豊田市水源町4-1-16

〔参考〕文化

## 安 井 伸 二 やすいしんじ

口演童話家、教育者。口演童話 1948～名古屋市生まれ。愛知教育大学卒。〔経歴〕小学校教員になってから子どもの文化に興味を持ち、体育遊びやゲームの指導に取りかかった。その後、わらべ歌、あやとり、伝承遊びなど子どもの文化を広く学び、名古屋市巡回少年教室講師として口演童話を中心に子どもたちの前に立った。現在、小学校の内外で子どもたちに口演童話を続けている。〔所属〕名古屋童話協会、名古屋市子ども文化研究会

〔住所〕〒453-0805 名古屋市中村区深川町1-41-1

## 山 田 正 巳 やまだまさみ

詩人。文学（詩）1922～名古屋市西区押切町生まれ。名古屋高等商業学校（現名古屋大学経済学部）卒。〔経歴〕1940年（昭15）頃より児童詩を始め、短い童話も書いた。『コドモノクニ』『鑑人形』（西条八十）『花箋』（中条雅二）などに投稿、西条八十選「若い中尉さん」（服部正・曲、糸井しだれ・歌）のビクター採用をきっかけに'41年に大阪童謡芸術協会入会、こ

の分野での活動を開始した。'42年学徒兵として召集され活動は中断した。'47年復員、中条氏主催文芸投稿誌『シスターズ』に、米国詩の翻訳を短期間('49)発表した。その後勤務の会社が多忙を極め、長期海外滞在もあって、詩歌の分野から遠ざかった。'75年中条雅二氏の「くちなし賞」を受賞、詩集『舗道のボタン』出版により同氏との再開を得、その童謡運動に参加することとなった。中条氏主催の童詩誌『えんじゅ』に、翻訳詩、創作詩などを継続して発表できるようになり、現在に至る。ミルン童謡翻訳により、日本イギリス児童文学会入会の機を得、海外児童文学から多くを学びつつある。〔業績〕詩・曲・振付『保育遊戯』（中条雅二他共著）日本律動教育研究所（'42）、『A. A. ミルン童謡集』（翻訳）中部日本教育文化会（'81）、「ミルンの童謡の訳をめぐって—小田島訳へのいくつかの疑問—」（*Tinker Bell* No. 27. '82）〔趣味〕音楽 〔所属〕日本イギリス児童文学会

〔住所〕〒466-0835 名古屋市昭和区南山町  
3-3

## 山 田 も と やまだもと

作家。文学（創作）1920～ 愛知県渥美郡神戸村（現田原町）生まれ。田原高等技芸女学校卒。〔経歴〕『水の歌』刊行以後、ときどき小中学校などで水のことについてお話をする。中日新聞に「トップちゃん見聞記」の掲載を機に、田原町中部小学校の機関誌に、短編童話、民話などを'64年（昭39）より掲載、現在も続いている。田原町文化誌『蔵王』1号から5号までに、田原町内の民話を発表する。『蔵王』は田原町の区制70周年を祝して刊行したもの。中部日本放送豊橋にて、「東三河未来くるランド」番組に、自作の童話、民話など1週1回、現在は

1ヶ月1回、ラジオ放送をしている。〔業績〕『ブーゲンビリアの咲く町で』金の星社（'93）、『水の歌』小峰書店（'81）、『よだかの夜でっぽう』〈ちぎり文学激励賞〉近代文芸社（'93）、『銀色の輪』新風舎（'98）、『家庭と学校』（小学校の機関誌）短編童話連載（'64～）〔趣味〕茶道、花道 〔所属〕田原町文化協会々員（常任理事）、日本児童文学者協会、中部児童文学会

〔住所〕〒441-3421 渥美郡田原町大字田原  
字本町 30

〔参考〕文化・作家

## 吉 田 正 信 よしだまさのぶ

研究者、愛知教育大学教授。文学（日本・近代）1941～ 京都府福知山市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。〔経歴〕児童文学への関心が促されたのは、学生時代の、小川未明追悼講演会と、鳥越信氏の講義とからである。その後、氏が学問としての児童文学研究の確立に努めておられるのを、一つの指標として受けとめてきた。勤務先では、小学校用教材研究の時間に児童文学をとりあげ、文学としての読みに力点を置いて扱ってきている。研究活動としては、専門である日本近代文学の一環としての面から児童文学を考えている程度であり、成果は断片にすぎず、体系化は望むべくもない。しかし課題としているのは、近代における児童文学成立状況の解明と、児童文学の文学としての読解と再評価である。その際、実証に徹し、自説を研究史上の第一線で展開することと先行研究の再説ではなく新見を出すことが必須であることは、いうまでもない。しかしこの学問としての基本が、児童文学の学界の現状を見ていると、日本近代文学研究よりも、ルーズな気がしている。〔業績〕「くおひ



さんのランプ〉(新美南吉作)」(共著、『文学教材分析の観点と実際』所載 明治図書出版 '79)、「ながいながいペンギンの話-蘇生した動物ファンタジー」(『読書案内〔小学校編〕』所載 大修館書店 '82)、『『家庭雑貨』解説・総目次・索引』(編著) 不二出版 ('87)、「〈小僧の神様〉論-その構成と思想性-」(『愛知教育大学大学院国語研究』No. 1. '93)、「桜井鷗村の『少年世界』寄稿時代」(『国語国文学報』第52集. '94)〔所属〕日本児童文学学会、日本文学協会、日本比較文学会、全国大学国語国文学会

〔住所〕〒465-0018 名古屋市名東区八前2-1007

## 依 岡 道 子 よりおかみちこ

研究者、名古屋女子大学教授。文学(研究・英米) 1939年～ 大阪府大阪市生まれ。関西学院大学大学院文学研究科修士課程修了。〔経歴〕児童文学、とくに英米児童文学に関わるようになったのは、13-4年前からであるように記憶している。児童教育学科の学生の「英語」(一般教養)の授業で、何を教材に用いるかを迷っていたとき、英米の児童文学作品を読むことを思いついた。学生たちが外国の児童書に接する経験がほとんどないということと、児童書は語彙の点からも比較的容易に読むことができるので、学生たちにおおむね好評であった。私自身は英文学の専攻であったが、授業で取りあげたフィリップ・ピアスの短篇集などは、むしろ大人の読者にいっそう深く捉えられるのではないかと思い、まず、ピアスから読み始め、つづいてキャサリン・ストーやE. ネズビットの作品を読んだ。最近の私自身の興味は、ヴィクトリア朝の女性作家、とくに、E. ネズビットやモルズワース夫人にあるが、ネズビットの〈語

り〉の方法とか、モルズワース夫人の再読の必要性について考えている。また、ヴィクトリア朝の児童書の挿絵と挿絵画家について興味を持っているので、目下、資料を収集中である。今まで、アメリカの児童文学にはあまり注意を払ってこなかったが、最近は、学生の要望もあって、E. L. カニグズバーグや、K. パターソンの作品をゼミ生と一緒に読んでいる。〔業績〕「ペネロピー・ライヴリーの *The Driftway* -主題と技法」(『名古屋女子大学・紀要』'95)、「イギリス児童文学と文学理論 絵本を中心に」(『名古屋女子大学・紀要』'97)、「ネズビットのバスタブル家三部作について-子どもの語り手の意味-」(『名古屋女子大学・紀要』'98)〔趣味〕映画鑑賞〔所属〕日本英文学会、大学英語教育、日本イギリス児童文学会(理事)

〔住所〕〒501-6081 岐阜県羽島郡笠松町東陽町18

## 驚 津 名都江 わしづなつえ

芸名小鳩くるみ。研究者・元歌手、目白学園女子短期大学教授。文学(研究・わらべうた、言語リズム) 1948～ 一宮市丹羽生まれ。青山学院大学大学院教育学研究科修士課程修了。教育学修士。ロンドン大学大学院修士課程修了。〔経歴〕名古屋千種区の母の在所で産声を上げたことから、名古屋の名をとり〈名都江〉と名付けられる。3歳3ヶ月でNHK 公開ラジオ番組「声くらべ腕くらべ子供音楽会」に飛び入りで参加。最年少で、ただ一人鐘を3つ鳴らす。その年、NHK クリスマス3元中継特別番組の名古屋代表として出演。1952年(昭27)4歳で上京し、すぐに日劇「秋の踊り」で、童謡歌手〈小鳩くるみ〉としてデビュー。その翌年に日本ビクターの専属歌手となり現在に至る。

上京後は帰郷するのも1年のうちの何日かにすぎず、それもほとんど実家で、過ごす程度である。その間、ラジオ「ちえのわクラブ」(TBS)、日本初のテレビ映画「ぼんぼこ物語」(TBS)など、子ども時代も多くのレギュラー出演をした。また少女雑誌『なかよし』の表紙モデルを6年間するなど、児童雑誌にも多く掲載された。NHK 歌の〈おねえさん〉としては、「なかよしリズム」(NHK・ETV)、「おかあさんといっしょ 〈うたのえほん〉」など、10年間にわたってレギュラー出演。同時にアニメーション「アタック No. 1」の鮎原こずえ役、ディズニー映画「白雪姫」の白雪姫役の声の吹き替えをした。これまでに小嶋くるみとしての単独LPレコードは25枚、学校教材・特殊教育用・家庭用シングルレコードは1000曲を越える。他にも「小嶋くるみ大全集」(CD2枚組)など多数ある。'86年9月以降は〈マザーグース〉研究、および大学での教育職などに専念している。〔業績〕『わらべうたとナーサリー・ライム』(日本童謡賞) 晩聲社('93)、『英国への招待・マザーグースをたずねて』筑摩書房('96)、『マザーグースをくちずさんで』求龍堂('95)、「マザーグースのセンスとナンセンス 英国伝承童謡の世界」(『ファンタジーの大学』所載DHC '95)、「久留島武彦文化賞受賞」('77)〔趣味〕ヨガ、ウォーキング〔所属〕日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会、大学英語教育学会、日本音楽著作権協会、日本青少年文化センター

〔住所〕〒107-0062 東京都港区南青山4-20-9 ダイアルサービス内

〔参考〕文化

## 渡 邊 美 樹 わたなべみき

研究者、名古屋大学助教授。文学(研究・イギリス) 1957～ 愛知県西加茂郡猿投町(現在の豊田市)生まれ。名古屋大学文学部・名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。文学修士。〔経歴〕児童文学に興味を持つようになったのは、教養部図書館に市立図書館なら児童図書室行きになるはずの『指輪物語』や『ゲド戦記』や『ナルニア国物語』があったことかもしれない。その当時は折り紙付きの純文学作品集と子ども向けの本が同じ書棚にあることがたいへん新鮮に見えた。まるで児童文学といわゆる純文学の間に本質的に差異はないと主張しているように思えたのである。文学研究の対象としてファンタジーを扱うようになったのは、このとき覚えた興奮の賜物であろう。よって私の研究対象は今でも思春期直後の子どもの読む本である。純文学の行き詰まりを児童文学や推理小説などの周辺文学が打破しているのをテキスト分析によって示していきたい。〔業績〕「王と同化」(『日本福祉大学研究紀要』No. 64. '85)、「隠された女性性-『秘密の花園』試論」(『児童文学論叢』No. 1. '95)、「花園の秘密」(『名古屋大学医療技術短期大学部紀要』No. 9. '97)、「ビルボーバギンズの道化性について」(『児童文学論叢』No. 3. '97)、「クラリッサは何処に-拒食と小悦」(『名古屋大学医療技術短期大学部紀要』No. 10. '98)〔所属〕日本イギリス児童文学会、日本児童文学学会

〔住所〕〒470-0353 豊田市保見ヶ丘5-1 保見団地142-619